# 本多猊下著書（在庫品）

○法華經講義　上下二卷　定價金六圓八拾錢　送料金參拾六錢
○法華經要義　定價金參圓拾四錢
○日蓮主義の本領　定價金貳圓五拾錢　送料金拾一錢
○日蓮主義の心髓　定價金壹圓八拾錢　送料金拾錢
○日蓮主義の精要　定價金參圓五拾錢　送料金拾六錢
○改版聖語錄　定價金貳圓　送料金六錢

以上「教」發行所へ御申込に限り定價の一割引、外に要送料

施本用小冊子
○本感應妙を信じて　一冊八錢　送料三冊迄二錢
○法國冥合　同前

東京市外南品川町妙國寺內
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番



| 統一定價 | |
|---|---|
| 一冊 | 金貳拾錢　送料五厘 |
| 半ヶ年 | 金壹圓貳拾錢　送料共前金之事 |
| 一ヶ年 | 金貳圓貳拾錢　送料共 |

| 統一廣告料 | |
|---|---|
| 表紙一頁 | 金貳拾圓 |
| 一頁 | 金拾五圓 |
| 半頁 | 金九圓 |
| 四分一頁 | 金五圓 |

前金之事

昭和五年七月廿四日印刷納本
昭和五年八月一日發行（第四百二十五號）

編輯兼發行人　神奈川縣橫濱市磯子區磯子町廣地一四八　礒部滿事
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地　都印刷所　電話高輪六〇二四番
發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　統一發行所　振替東京五一〇七一番


不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

## 目次


宗教の本質より見たる佛教（下卷）……本多日生
不況の對策は靈內不離の合理化……石田誠
○各地教報
○彙報
○誌料領收


第三十五年九月號

# 宗教の本質より見たる佛教（下卷）

目次

一 佛教の卓越　二 人間の本體　三 人生の實相　四 超人的資格者　五 感應利益
六 精神生活の中軸　七 道義の實行　八 人類文化の最大要素

大僧正　本多日生

## 一、佛教の卓越

この講題に就ては前二回に亘つて、先づ宗教の本質に關する事柄と、さうして佛教がその宗教の本質に對してどういふ位地を有するものであるかといふことを申述べて、洵に整頓した模範的な宗教が佛教である、いろ〳〵の宗教を研究するといふよりも、寧ろ佛教を以て宗教の模範として世界の人類がこれを奉戴すべきである、全世界の高等なる宗教として觀られるものは、佛教の他に基督教或は婆羅門教、印度教といふやうなものがあるけれども、遠く佛教に及ぶものではない、佛教が東の大關、基督教が西の大關といふやうな、さういふ比例は毫も中るものでないといふことを申上げて置いたのでありますが、更に一段立入つて、佛教は宗教の本質より觀て、斯までも尊く、斯までも深く、斯までも整うて居るといふ徹底した佛教の卓越性を御紹介して置きたいと考へるのであります。

## 二、人間の本體

宗教の本質に關しては最初に申述べた通り、『宗教の本質とは、人間の本體と、人生の實相と

を明かにし、宇宙には超人的靈格者の實在を信じ、その兩者の感應に依り、精神的生活の法悅を得、そこに道義的感情を養うて、過を改め善を行ひ、この教化を以て人類文化の一大要素を成すものなり』

斯樣な定義を定めて話を進めたのでありますから、今日佛教の特殊の卓越を語るに就ても、この順序に依つてお話を纒めて行きたいと思ふのであります。

それ故に第一に、人間の本體に關する說明として、佛教はどういふ風に卓越して居るかといふことを明かにする必要がある。抑々人間の本體といふことに關しては、佛教外の思想は殆ど觀るべきものはないと言つて宜いのである、佛教に比較して優劣を爭ふところではない、比例にならぬくだらないものである、佛教を除いては人間は自分を了解することに於て、斯くまでも粗雜、斯くまでも幼稚、斯くまでも愚なものかといふことがわかる、佛教を除れば人間は暗愚なりといふいとを明瞭にして居るほどのものであります。その點を能く味つて見たら宜いと思ふ、一番大事な自己に關する觀念が少しもハッキリして居ないのである。近頃自己發見とか自我實現とかいふ語はあるが、その自己といひ、自我といふものを考へる考へ方といふものは、學問、宗教一切を寄せ集めて見ても、佛教外のものは殆ど觀るに足らざるものだと私には考へられるのであります。

東洋の文化の中で言へば先づ儒教と惟神道でありますが、或る點に於てはこれ等は無論結構な教でありますけれども、「人間とは何ぞや」といふことになつて惟神道に聽いて見たならば、「その點はチョット待つて呉れ」……と言ふでありませう。どういふ風にして人間は成立つて、どれが本體であるかといふことになれば、漠として答ふる所を知らない、若し强いて答ふれば抱腹に堪へないやうなことを言つてお茶を濁すくらゐのものでせう。惟神道に於ける人



間觀といふものはどういふ工合になつて居るか、どういふ風にして人間が出來て、人間といふものはどんなものかと言へば、ひとりでに出來てまご〳〵して居るものやといふやうな事になつて居ると思はれる。マア强いて言へば神樣が造つたといふやうなことにでもなるのか知らんけれども、それもハッキリして居ない、本來の存在者であるといふやうな意味もハッキリしない、要するにその問題には觸れて居ないものと言つて宜い、惟神道には人間の本體に關する定見無しといふのが眞實ナンである。

然らば儒教はどうであるか、儒教は、天地の間にあるところの潛める氣を受けてそれが善心となり、濁れる氣を受けてそれが惡心となるといふやうなことを言ふけれども、氣を受けてといふのはどういふことであるか、たゞさういふ事を言ふだけのものであつて、人間の成立及び人間の本體といふことに就て哲學的眞理として觀るべきものは何も無い。隨つて人間が生れる時出來たのやら、死んで消えるものやら、或は實在性のものやら、そこは少しもハッキリして居ないものである、所謂『生を知らず焉んぞ死を知らんや』で、前もわからず後もわからず、ちようど兩國の橋の上にまごついて居る田舍者の小僧が「お前は何處から來た」「何處から來たかわかりませぬ」と言ふやうな譯である、「何處へ行くのだ」「行先がきまつて居るならまご〳〵しませぬ」といふやうな譯で、尙に人生といふものを表面から見て居るのが儒教の思想である。

それでは西洋の方へ行つたらどんなものが出て來るかといふと、宗教としては先づ基督教である、基督教は神樣が人間を拵へて呉れたと言ふ、けれどもその拵へ方といふものは、聖書の初めの所に書いてあるのは、赤土を揑ねて自分の形に似せて男を拵へたといふ、それが晝寢をして居る所を、一人では淋しからうといふので、今度は右の脇腹を扶つてそれ

を捏ねてフット息を吹込んで女を拵へたといふのである、元は男一人で、女は男の脇腹の肉を削いで拵へたのである。それはどういふ意味で解釋するにしても、最初の人間はさうして造られた、それがだん〳〵子を生んで行くといふならば、今度出來る人間は何も神が拵へるのではない、所謂人間の父母が拵へて居る譯である、無論今日は人間の親が拵へ居る、さうするとその時に魂だけを神樣が横から手傳うて吹込んで呉れるといふやうなことになつて、實に童話に等しいやうなものである。さういふやうな譯であるから基督教が人間の本質本體を解釋することは洵に漠然たるものである。

科學の知識の方から言うたならば、人間の魂の存在を今日疑つて居るのだから、魂といふものは機械的運動であらうといふのが唯物論的科學である、例へば時計の如くに機械の精巧なものゝ、機械が進歩して魂のやうな作用をする、人間とは進歩せる機械なりと考へて居るので、先づ第一に人間の本質本體といふものゝ考へ方が科學といふものは到底話にならない。たゞさういふやうな表面から物を判斷して居る、所謂進化論の方面から、初めは無機物であつたものがだん〳〵進化して有機物となり、それが動いてだん〳〵大きくなつて魚になり、飛魚みたやうになり、羽が生えて鳥になつて、鳥がだん〳〵出世して猿みたやうなものになり、猿が出世して人間になつたといふやうな譯で、マア人間は富士の山に登つたやうなものである、それから以下の鳥とか魚とかといふものはまだ進化の途中にあるので、山を登りかけて居るといふやうな事をやかましく言ふ。だん〳〵研究して見るとごみの中に人間が入つてしまふ、その代り死ねば又ごみになつてしまふといふやうなことを敎へて呉れるので、心細いやうな變なものである。

その他には何にも無いのである、西洋では基督敎の思想と科學の思想だけで、その他にはだゞ哲學が少しばかり、オイケンなどに依つて生命は即ち實在性のものだといふことを最近言ひ出したゞけのものである、まだ〳〵それがホンの入口の所をやつて居るのであるから、わかりかけたといふだけで、西洋には別に人間を解釋する上に於て參考とするやうなものは無い。

それが一たび佛敎の中に入らうものならばどうであるか、人間を解釋する上に於て實に完全にして至れり盡せるものである。人間の本體といふものは一たび佛敎の經典に觸れて見れば、華嚴經でも圓覺經でも、阿含經でも法華經でも涅槃經でも、實に立派な說明を與へられて居るものである。

その點に於て、宗敎の本質が人間の本體を明かにすべきものだといふ第一の命題に對しては、何も問題は無い、佛敎に來なければ人間の本體は明かならずといふ點に於て、一切の宗敎は——宗敎ばかりではない、學問も何も一時に頭を低げて佛敎の敎を信ずるのが當然である、いゝ加減な學問をして豪さうな顏をして居る者は、却つて自分がわからなくなつて自暴自棄で一生を暮すやうなものである。佛敎は反對の出來るものではない、無理に掌を合せろといふ譯ではない、「成程佛敎に依つて自分の價値が能くわかつた」といふ事になる、その敎を一たび受けたら振捨てやうとしても振捨てられるものではない、振捨てたら自分を殺さなければならぬ、自分の魂は行方もわからず、風來物でつまらぬものだといふことになれば佛敎が棄てられるけれども、我が魂は生れぬ前より存在し、死しても滅びないものである、その魂の中には廣大なる尊さを有つといふ、その生命の永存と內容の價値が明かになつたならば、これを忘れようとしても忘れられるものではない。これに背かうとしても、背かうとすれば自分を馬鹿にして掛らなければならぬ、「自分は滅びてしま

ふもので、價値の無いぐうたらです」といふやうに、チッパリくだらぬ人間になつてしまへば佛教が棄てられるけれども、「斯う見えても俺の魂といふものは永存する、今はぐうたらでもその奥には價値が有るぞ」と自分の眞價を認めようとすれば、お釈迦樣の教に來るより仕方のないものである、一時は自分でいろ〳〵の事を考へるけれども、普通の人間の考へることは斷片である、それが整頓されゝば如來の教と一致する譯である。

そこでその人間の本體に關して佛教の微妙なる特色を申せば、これは法華經に於て佛性論として現れて居りますが、阿含經に於ては人性清淨、人の性は清淨であるといふことから說かれて居る。さうして生命の永存といふことは、佛教が最初から終りまで、所謂斷常の二見といふものを敵として居る、斷見といふのは今の靈魂滅亡の邪見であるから、その斷見外道を攻擊し、常見といふのは死んでもいつも幸福があるとか、惡い事をしても怖れるに足らぬとかいふやうな因果應報の理を撥無するものを攻擊したのである。だから斷見外道を擊ち、常見外道を擊つた佛教といふものは、魂の永存と因果應報の理といふものを原則として組立てられて居るものである。それを信ずればモウ佛教徒である、魂は死んでも消えないものである、善い事をすることは業の力となつて己れの生れ更つて行く原動力を成すものだといふ因果應報の理を信ずれば、それが即ち佛教徒である。佛教を聽かないでもさういふ考を有つて居る者は、如來の教の影響が人文の上に及んで、何處からともなくさういふ風の吹き廻しに依つて心がさうなつて居るのである。だから日本人の大多數といふものはまだ〳〵佛教の教化の内に棲息して居るものである。それは田舍に行つて無智蒙昧なお婆さんを捉へて「あなたは死んだら魂は消えてしまふと思つて居るか、先祖の靈も親の魂も消



えて無くなると思ふか、法事や葬式をして貰ふのは無駄なことだと思ふか」と聽けば「そんな馬鹿な事は無い」と言ふに違ひない。自分も死んで消えるとはどうしても考へて居ない、さうして善業と惡業といふものは必ずや後の結果を伴ふものだといふ觀念を有つて居る。それはボンヤリとしては來て居るが、一つ刺戟を與ふればその觀念に戻るといふのは、まだ〳〵佛教の與へた感化が地を拔はないからである。

そこでその佛性の問題がだん〳〵說き進められて來ると、法華涅槃に來つてそれが力强く說かれて、その佛性の目覺める意味合、人間の價値が潛在的でなくして顯動的に働いて出る意味合を示されて居る。これを鷄の卵にすればいつ迄も卵ではかり居ないで、卵が孵でて雛となり、雛が成長して行くといふ、その潑剌した意味合といふものを力强く說明するのである。議論の宗教ではなくして所謂實行の宗教であるといふのは、その佛性が潛在して潛んで終るものではなくして、はたらいて出る、人間の心は如何にしてもその佛性の顯動に依つて善を行はなければ氣持が惡い、人が惡い事をすれば内心の制裁を受けて「アゝどうも惡い事をした」と氣に掛る、「あれは自分の落度であつた」とか、「自分の惡心の爲であつた」といふ悔悟の精神が始終己れの心を刺戟する、その刺戟するものは、佛性が一方に目覺めて居つてコラ〳〵と言つて叱りつけるから、それが後悔の念を起さすのである。除程惡い人間でも善の精神といふものは又一方になか〳〵强い、表面から見ると人間は惡い事をする力が强いやうであるけれども、腹の底から言うたならば、佛性の目覺めて居る力といふものは更に强いものと謂はなければならぬ、酒を飲んだり何かするのは、その佛性が目覺めるのを、ごまかさうとして醉ぱらつて居るのである。泥棒が女郎屋に行つたり料理屋に行つたりする

のは、さういふ刺戟に依つてこの佛性が目覺めて自責するのを、「お前も一緒に寝て呉れ……」といふことの爲にダイ〳〵酒を飲むのである。非常に亂暴のやうに見える、酒を喰つて遊び散らかすといふけれども、さうではない、彼は佛性の刺戟に堪へずして轉げ廻つて居るものであるとも言へる。

だから非常に性の惡い婆さんが嫁を虐める、虐めて良い心持だといふのはチョット表面にあるけれども、又腹の奥には、あゝいふ事をして到頭嫁が首を吊つて死んだ、幽靈になつて出て來はしないかと思つたり、幽靈になつて來ぬにしても、あれが浮玻璃の鏡に映るといふ事が本當であつて、閻魔樣の前へ行つて言譯をする時分に、自分のやつた惡い事が映りはしないかと思つたりして、いろ〳〵あゝだ斯うだと考へ煩ふといふのは、人間に一方に佛性といふものゝ目覺があるからである、これはなか〳〵に強いものであると思ふ。人間は惡に強いといふけれども、惡を犯した後で責められて、或は木賃宿の二階で寝言を言うて「勘辨して呉れ」といふやうなことを口走つてそれが因になつて捕へられたりする、ピス健といふ兇惡なるピストル强盜があつたが、彼は捕へられると第一審の判決で直に死刑に服した、その時に彼は言うて居る、「控訴などをして一日でも長生きをするといふやうなことは私はしない、切めてこれが私が謝つた證據だから、今まで殺された人及びその人々の遺族、親族の者はこらえて呉れ、控訴すればまだ幾日か生きて居られるけれども、自分が惡かつたといふ謝罪の意味で第一審に潔く服罪して死刑に處せられるのだから、これで切めてこらえて呉れ」といふことを告白して居る。それはやはり彼の佛性の爲に悟したものである、他から教へられたものではない、己れ自身の精神の内部にある佛性の力である。それをお釋迦樣は、徹底的に見透されて居たから、どんな惡い奴でも内外相應じて善心



に還るものである、外からは佛がこれを善導し、内からは己れ自身の佛性が内應することに依つて内外挾み擊を喰はせれば、どんな惡い奴でも落城するといふことを確認せられたものである。その事が法華涅槃に現れて居るところの内薫外薫と云ふ佛性論の大事な點であります。

これを行佛性と申して居ります。「行」といふ字は佛教では活動する意味合である、物を行ずるといふのは行ふといふことで、活きて動いて居ることを言ふ、即ち佛性が活躍して居る、決して潜在的のものではない、泥棒が悔悟して涕を流すといふやうな所は、泥棒が監獄に入れられて泣いて居るのだと言ふけれども、それは佛性が活躍して居るが爲にその惡人が涕を流して居る譯である。さういふものを皆有つて居る、人を殺してその及に飯つた血を殺された人間の着物の袖で拭はうとするとき、その殺された人間の顔を見て嘲笑つてフヽン……と言ふ、それが二通りになつて居る、「態を見やがれ、己れ憎い奴、これで目的を達した」といふ心持と、その瞬間に「さうは言うても可哀さうだナ」といふ心持がそこに現はれる、これは實に人間の尊き佛性がそこに動くのである。これが犬や猫であつて見れば、ズット佛性が隱れて居るから、犬や猫は噛合をして相手を噛み殺しても「態を見やがれ」といふだけで、「併し可哀さうだナ」といふことは出て來ない、ギャット噛み殺した切りでちつとも同情心が無い。人間はどんな亂暴な奴でも惻隱の心といふものは動く、それを活動性の行佛性と申して居る。

それは一切經に現れて居る譯であるが、殊に法華經に於ては女人の成佛、惡人の成佛といふやうな話に現れたものである。女人成佛といふのはおかしな話だけれども、佛教以外では印度では女といふものは罪の非常に深いやうに言うて居る、印度ばかりでなく日本でも女は「をなご」と言つて業が深いといふ

やうな事を言ふ、「をとこ」といふ方は濁らぬけれども、「をなご」は「ご」と濁るなどと言ふ、そんな事は皆嘘である、「をなご」と言はないでも「女子」と言うて置けば宜い。さういふ事は馬鹿くさい話だけれども、昔は嘘のことを敎へて、印度でも女の事を非常に頭を抑へて居つたから、そこで佛敎はそれに反對して、女と雖も佛性の顯現、活動といふものは少しも違ふものではないといふので、法華經では八歳の龍女が成佛をする事柄を現した、それが外形に現れてその女がなか〳〵優雅でお辭儀の仕方も上手であるし、話も上手である、侮るべき點の無い事を現して居る、男の方が皆感心した、「お辭儀をしてもその態度といひ實に立派だナ、佛樣も可愛がつてござるやうだ、女だと思つて馬鹿にして居つたけれども、こつちの方が皆駄目だやう」といふ風に、一會の大衆が降易して居る。これなどは芝居にすれば實に面白い所である、今まで男の方がえらさうな事を言ひ居つたけれども、お釋迦樣の前に出るとモウその女の爲に、一擧一動、一言一行悉くそれが中心になつてしまつて、他の者は皆ボカンとして、舍利弗も智積菩薩も皆降易してしまつた、そこで最後その女が立派に佛に成り、集れる大衆は默念信受といつて默つて頭を低げて恐入りましたといふことになつて居る、そこが非常に大事な點である。女性といふものはこれを啓發し、善導し、さうして社會の風潮を矯して行けば、男女の間にさういふ優劣を見るべきものではない、男は男としての特色があり、女は女としての特色がある。女にも惡い所があらうが男にも亦惡い所がある、女よりもより惡い所がある、その證據は監獄へ行つて見たならば、女が餘計入つて居るか、男が餘計入つて居るかと言へば、男の方が餘計入つて居る、それは事實明瞭である、どつちが性質の惡い事をやつて居るかと言へば男の方がより惡い事をやつて居る、殺ら坊さんが嘘を言うても、



刑務所へ行けば論より證據、直ぐわかる。さうして女が惡いと言つたところがそれは罪の性質が違ふ、男の方がズット質が惡い、女が暗闇で待受けてピストルを突附けて强盜をしたといふやうなことは無いけれども、男の方はいつもそんな事をやり居る、男女の關係に於て罪を以て論ずるとき、決して男の方が罪が輕いとは言へないといふのがお釋迦樣の持論である。

だから『大乘の敎には男無く女無し』と言つて、男女といふことに依つて區別を見ないといふ、或るお經などはそこに現れて來た女が、男であるか女であるかわからぬ相になつて居る。さういふ事も別に不思議ではない、役者のことを思うて見れば、あれは男とも女ともわからない、非常に美い女だと思つて居ると、それは何とかいふ男の役者である、男の役者が本當の女よりも別嬪になる、あれで見ると男女といふやうなことはホンの少しの表面のことで、男無く女無しといふことが本當である。それは提婆品にも變成男子とあるが、變じて男子と成るといふのは、男子に成らなければ佛に成れぬといふのではない、男とか女とかいふやうな男女の區分は固定的なものでないといふことを示したものである、寧ろ變成男子とは大乘の敎の男女の區別無しといふことを知らしめるものである。それは非常に大きな思想ナンである。その代りに女はそれだけの責任を自覺し力强き活動をしなければならぬ、斯ういふ風になつて來る。

それから惡人の成佛を說かれた點に於ても提婆の成佛を許され、阿闍世王の如き人が悔悟せられて、佛に反抗した人が却つて一切經を結集して後代に佛敎を傳へられたといふことの如き、如何にも偉大な仕事である。阿闍世王の如き惡人でも惡が表面に現れて居るけれども、他面に行佛性の活躍があつて彼もそこに悔悟し、さうして一方に廣大なる佛事を成

就して、佛教を後代に傳へしむるところの根本の一切經の結集といふ大事業を爲し得たものである、一番の惡人が一番大きな善い事をやつて居る。斯樣に人間は佛性を有し、その佛性がなか〳〵えらい力を以てはたらくものである、それを抽出すことに依つて個人の價値もあり、家庭も社會も國家も發達する、人類の最後の文明も、この人々の有つて居るところの佛性の活躍に根抵を置く文明を造らなければならぬといふことになるのであります。

左樣にして人間の本質本體を明かにする點に於て佛教くらゐ完備したものはない、佛教が人間を罪の側から觀たやうな事ばかり言うて居る者もあるけれども、それは佛教の完全な觀方ではない、無論罪といふものは人間に有るけれども、それは寧ろ表面である。人間の心には佛性と煩惱とがある、その二つの關係を觀る時には、煩惱はこれを客煩惱といふのであつて、佛性を主人とする、煩惱は居候である、その觀方が非常に宜いのである。基督教でもその他佛教の或る宗旨でも、人は罪の子であるとか、罪惡の塊りであるとかいふやうなことを盛んに言ふ、その罪の爲に斯ういふ不幸な目に遭つて居るのだから懺悔しろといふやうなことを言ふけれども、それは間違つて居る、罪はあるけれども人間を罪の側から威しつけべきものではない。それは子供に缺點があつても、缺點の側ばかり指摘して叱言を言ふべきものではない、「お前のやうな馬鹿者は碌な人間になれないゾ」とばかり言つて居れば、結局は不良少年になつてしまふ、必ずや發奮すれば立派な者になる、決して聖人賢人といふものが別なものではない、學んで進めば汝も亦聖賢の域に進むことが出來るといふことで人は教育されなければならぬが如くに、人各々が立派な佛性を有つてそれが活躍するといふ側を表に教化しなければならぬ。

孟子も『能はざるにあらず、爲さざるなり』といふ事を言うて居る、それが大事な點である、出來ないのではない、しないのだ、發奮すれば出來る、可能といふことが非常に大事なことである。「私は女だから何も出來ない」「私は無學だから何も出來ない」。「私は坊主だから何も出來ない」「私は金持だから何も出來ない」、「貧乏人だから何も出來ない」、……皆屁理窟を附けて何も出來ないと言うて居つては駄目である、如何なる者でも發奮すれば、善を爲すに力の足らざる者あることを見ると孔子も言つて居る。お釈迦樣はそれの親玉である、人は如何なる者でも心機一轉すれば善を行ふ力の足らざる者あること無し、佛に成り得る力に於て足らざる者は無い、『力あり、能有り、以て正法を受くるに堪へたり』と說かれる、洵にさういふ教化が佛教は整頓して居ると思ふ。その應用を誤つて、佛教が威しつけるやうなことを言つて、「お前は死んだら地獄へ行く」とか、「罪が深い」とか、「宿世からの罪業だ、因緣が惡く生れて居る」とか、そんな事を言つて氣を腐らすのは間違つて居る。尤も低級な人間はそれでないと信じない、お婆さんにこれが如來の正法ぢやと言つても信じないが、淨玻璃の鏡の繪でも持つて行つて「お婆さん、これが閻魔樣の所にあつて、ナンボ隱して居つても皆映るのぢや、こつちに青鬼が居つて棒でどづかれる」といふやうなことを言ふと、「ア、怖しいナ」と思つて信心する。それで威かされなければ信心しないのはその人間が非常に低級ナンである。社會に於ても法律の制裁に依つて、「そんな事をすると牢へ入れられる」、「そんな事をすると巡査に縛られる」といふやうに、巡査と刑務所を考へて動いて居る人間といふものは、それは淺草公園邊りに居るところの不良兒と泥棒の卵みたやうなものである、「自分は折角日本人に生れた、立派な人間にならなければならぬ」といふ向上精神を以て奮勵努力して居るところの學生達が本當のえらい人間ナンである。宗

教もその通りで、威かし文句でやるのは、幸龍寺の墓場に居るところの不良少年の輩と同じものである。爺さん婆さんが威かし文句でなければ信心しないといふのは駄目である。けれども淺ましいことにお互ひ人間はその方もちつとは聽いて置かぬといふと信心が弛むから、少しは聽いて置くが宜い、それも全然無いことではない、さういふ惡い事をすればやはり地獄に行くのである、けれども死んで地獄に行くのが怖いから善い事をするといふのは、斯ういふ事をして居れば刑務所へ引張られるから……といつて怖がるのと同じ譯ナンであるから、如何に己れの精神が低いかといふことを知らなければならぬ。

## 三、人生の實相

次に人生の實相といふことでありますが、人の世の中はだん〳〵複雜にもなり變化もする、又社會學といふものもあり、此頃は社會科學ナンと言つていろ〳〵と研究して、「お釈迦樣などは昔の人で社會の極く幼稚な單純な時代に印度の山の中に出たのだから何も知らない、吾々は世界の全體に亘つて二十世紀の人類の文化を見て居る、所謂一九三〇年のその尖端に立つて社會を達觀して居るのである」といふやうなことを言つて、今日も電車のストライキなどをやつて騒いで居る、あゝいふ風な輩が人生を能く看破つて居るかと言へば決してさうではない、あゝいふ輩は人生を極く皮相に看て居るのである。又他面から言へば偏つて觀て居るものである。たゞ利害の關係や物質の生活といふやうな事のみが非常に重い事に考へて、お互ひに寄つて人生を造つて居るこの社會を知らないものである。いろ〳〵な事を言ふけれども彼等は我儘勝手のもので、人がどんなに困らうが構はぬ、今度の東京市電のストライキの如きも、僅に一年に貰ふ賞與金の一割だけを減する、減ぜぬといふことの爲に喧嘩をして居るのである、何も尊いことはない、彼等自身は一生懸命やるから、何か尤もな所があるかと思つて能く聽いて見れば聽くほど馬鹿くさいものである。終になれば「俺はやる積りはなかつたけれども一緒にやらなければチト工合が惡いものだから……」といふやうな言譯をして居る、電車のストライキといふやうな大きな事を決行するに、如何に根據無く信念無きかといふことを表白して居る。そんな者が人生のわかりさうなことがない、人生どころではない、自分もわからない、今日ストライキをして居る、ストライキそのものがわからないであらう。

この人生の實相といふものはいろ〳〵考へなければならぬ事があるが、要するに人生はさう思ふやうにならぬといふことが事實あるのである。所謂人間の世の中は天國でもなく淨土でもない、人生は不如意と言つて、意の如くならぬといふことがある。お釈迦樣は先づさう見て居る、三界は皆苦なりとまで言はれて居る。併しその三界――人生そのものが惡いかと言へばさうではない、人各々の精神の中に苦を招き寄せるものを有つて居つて、自らそれを招き寄せるのである。紙屑拾ひみたやうなものであつて、街を歩いて鼻紙を拾ふとか或は煙草の吸殼のやうなものを拾つてさうして籠の中に一パイ入れて來て、家へ歸つて開けて見ると碌なものはない、「つまらぬ物ばかり拾つて來たナ」と言ふけれども、もと〳〵紙屑拾ひナンだからそんなに善い物がある譯のものではない。人生に於ていろ〳〵の嫌やなやうな事が出來る、それはどうかといふと紙屑拾ひが紙屑を拾つて歩くやうに、自分が拾つて廻る譯である。「俺はそんな馬鹿な事はない」と言ふだらうけれどもさうでない、能く考へて見たならば人生の苦といふものは、自分の心の煩惱を以てこれを招き寄せるものである、煩惱が無かつたならば一つも己れの苦といふものは來らない。

その事も佛敎に於てはなか〳〵能く研究されて居る、殊に法華經の中には『諸苦所因貪慾爲本』、諸の苦の因つてきたる所は貪慾を本と爲すとある、人間に貪る精神といふものがある、それが本になつて苦といふものが起つて來る譯である。その貪慾といふものはいろ〳〵に分ける、五慾と言へば五つになるけれども、殊にその中で猛烈に來るものは財色の二慾と稱して、金錢の慾望と男女の慾望が強い、多くはこの二つである。新聞などの人殺しや何かの原因を見て御覽なさい、必ず原因は痴情の結果であるか、或は金錢上の恨みであるか、此の二つである、必ず人を殺したり物を打ち壞したりするのは、痴情か金錢である、これを財色の二慾と言ふのであります。

それは一通りは人間であるから、金錢の事或は男女の事を考へるのは無論惡い事ではないけれども、これが度を過すものである、どうしても惑溺性のものである、そこを佛敎は看破したものである。それは自分自身で考へて見たら能くわかる通り、金錢の慾望といふものは幾らでも制限がなく現れて來る、最初は「先つ金の千圓もあつたら」といふやうなことを考へて居るが、千圓になるとまだ足らぬ、「今度は一萬圓もあつたら……」となる、それが一萬圓になつても決して慾が切れるものではない、だん〳〵欲しくなる、一萬圓ぐらゐの所はまだ宜いけれども、十萬圓ぐらゐになつて來るといよ〳〵猛然として慾心が高まつて來る。男女の慾望でもやはりその通りで、偶に料理屋にでも行くやうな者は、まア藝妓を招んで酒でも飲んで宜かつたといふけれども、毎晩行くやうになつて來ると藝妓も一人や二人ではいかぬ、「彼奴も呼べ、此奴も呼べ、電話を掛ろ……」とやる、それは可笑しい位のものである、家へ歸れば立派な奥さんもあり、其席には美い藝妓も居るのだけれども、「彼奴が電話を掛けても來ないのは不都合だ」と言つて怒つて皿を割つたりするやうな人がある。それは東京より大阪邊りの人はモツト酷いやうであります、「一體どのくらゐ君達は藝妓などに金を使ふか」と聽いて見ると、「少くとも月に五千圓は無くてはいけませぬ、思ふやうに使はうとすれば一萬圓ぐらゐ要ります」と言ふ。さういふ巷に入つてバツ〳〵とやり居る人は五千圓、一萬圓といふものを藝妓を買ふ費用に充てゝやつて居る。益々さういふものは旺盛に現れて來る、實に制限の無いものである、或る程度に於てこれを抑制すれば宜しいけれども、抑制するといふことがなければ益々高まるものである、それが諸の苦の因を爲すと言はれてある。

だから人間は財色の欲といふものは全滅は出來ぬけれども、これを適度に制御して行かなければならぬ、ハンドルを捧へて、そのハンドルを止める時にはそれが能く利くやうにして置かなければいかぬ。電車や自動車のハンドルが利かないといふことになれば直ぐ衝突してしまふ、多くの人はそのハンドルが壞れて居る、男女の慾望とか金錢の慾望では、ハンドル無しの自動車が飛んで居るのだから堪つたものではない。そこで直ぐにストライキみたやうなものを起す、あれはハンドルの壞れた財慾である、それだから賞與金一割減といふことの爲に騒ぐやうなことになる、給料の一割減とでも言ふならばまだ尤もな所もあるけれども、賞與金といふものは儲かるから賞與金がある、儲けが減つたから一割減すると言ふ、十圓のものを九圓貰ふくらゐのことが何であるか、それで食へるの食へぬのと言ふ、それは嘘である。そんな事を言うたならば坊主などはどうであるか、葬式がなければ一割減するどころではない、生活の保障ナンといふものは何處にあるか、坊主ナンといふものは、今月は何人死んでどこに葬式があるだらう……そんな事を豫定が出來るものではな

い、けれども平氣なものである、何處の和尚でも、この月どこの親爺が死ぬだらうといふことを豫定はして居らぬけれども、ストライキをすると言つて騒いで居る坊主は居らぬやうなものである。或は又そこ等の店にしたところが、菓子屋でも煎餅屋でも、今月は必ずこれだけ買つて呉れるといふ豫定はありはしない、それを工場從業員のみがあゝいふ事を言つて騒ぐ。それは會社が非常に儲けて居つて資本家が横暴するといふことは宜くないけれども、電車のやうな市の公營事業であり、公衆の利便の爲に設けられてあつて、さうして收入減の爲にさういふ問題が起つたとすれば、モット穏かに解決しなければならぬ、それをワイ〳〵言つてストライキをやるが爲に非常な苦勞をすることになる。ストライキなどといふことは表面は景氣が良いやうだけれども、今夜は家へ歸ることも出來ない、何處へ寝ると言つても寝る所が無い、食料もうまく廻つて來るか來ないかわからぬ、けれども集るべき所に集れと言つてワイ〳〵やつて居る、それはえらい事になる。その結果が家へ歸れば女房の機嫌が惡くて「あなたは何處をノツ〳〵して居るのですか」と言つてゴタ〳〵する、その中に解雇の通知がやつて來る、親類の叔父さんがやつて來て「お前は今まで世話したけれどもさういふ料簡ならモウ世話をせぬ」と言ふ、なか〳〵えらい問題が起る。終ひには頭を低げて「モウ一遍使つて呉れ」と言ふ、市の方では「斷じて使はぬ、今度解雇された者は斷じて使はぬ」といふことになつて、その結末の所に行つたならば實に悲劇である。前にもストライキの結果三百何十人が到頭食ふに困つて、大迫大將などが世話をして明治神宮の造營の人夫に使つて貰ふことになつて、大將が自ら行つて鍬を執つて一緒にやつた事がある、さうして漸く生活の保證をせられた事を知つて居るが、今度もやはりそんなやうな事になるのが落ちである。



斯樣に人間の一切の苦といふものは、餘りに慾望を制限しない爲に起るものである、人々の慾心を煽つてそこに幸福があるといふのは間違つて居る。それは煽らなくても慾心は十分有つて居る、「お前もちつとは女の事を氣を揉め」などと言はなくても、いゝ加減氣を揉んで居る、「お前もちつとは唐辛子でも食つて金錢上の慾心を募れ」、……そんな事を言はなくても能く心得て居る。

だから財色の慾は、相當これを鎮靜せしめ抑制しても、程よき所が得難いくらゐなものである、これを今日のやうに表に出して煽動的の文化を造つたならば、必ずや軌道を逸するにきまつて居る。男女の慾望でも今日のやうに煽動的なモダン式の事をやる、又財産上の事でもストライキのやうな、あゝいふ事をして利益を爭ふのが文明の事業である、引込んで居る奴は馬鹿者である、己れッと言つて飛出すことが勇ましいのだといふやうにやつて行けば、どの位喧嘩をやるかわからぬ、それは何と言つても今の文化理想が間違つて居る。利害の衝突は人生に免れないけれども、そこにお互ひに協調するといふ精神を以てやつて行かなければならぬ、今倫敦で軍縮會議を開いて平和の爲にやつて居るが、やはり同じ事である。それは所詮協調の保てない事もあるだらうけれども、唯だイキナリお互ひに己れッ〳〵と言つて殴り合をしに行くのだといふのが今のストライキの遣方ではないか。同じ所で働いて居りながら、委員なら委員に擧げられた者が、電氣局長に對して夜の九時に返事をするといふことを約束した、だからチャント禮儀正しく返事をしてそれからストライキをやるならまだ宜い、力士でも土俵の上に立つて兩方でお辭儀をしてそれから勝負をするのである、それを一方が土俵の上で待つて居るのを後ろからどづきに行くやうな事をやるのが今のストライキである、自分の方ではチャント前に相談して、ストライ

キをやるべき命令を午後六時に出して居る、さうして十時過になつて局長が電話を掛けたら「返事には行きませぬ」と言ふ、そんな無作法な事をしてストライキをやつて何になるか。それ一つでもわかつて居る、モット秩序正しい觀念を以て行かなければならぬ、それには慾心を制御しなければならぬ。

マルクスあたりが人間の慾心を煽ることに依つて社會が完成されると思つたのは大間違ひである、自分の一家の内で考へて御覽になつたらわかる、社會といふと大きいからわからぬやうだけれども、一家の内にしても、主人なり、奥さんなり、お婆さんなり、娘なり、女中なりが皆慾心を煽るやうに、「お婆さん、あなたも默つて居つたら損ぢや、芝居の二遍や三遍は觀に行きなさい、行くのが嫌やなら芝居を觀に行く錢を取つて置いて納つて置きなさい」と言つて煽動する、女中は女中で公休日を呉れとか、公休日には壽司を食はせろとかいろ〳〵なことを考へる、斯ういふ風にしてお互ひに利慾を煽るやうになり、親父はそれに對抗する爲に、「同じ芝居を觀に行くなら何處の芝居が安からうか」といふやうなことを研究して居る、そんな事ばかり互にやつて居つては眞の家庭の幸福といふものはありはしない。これに反して互に讓合つて、「お婆さん芝居に行つて御覽なさい、」「イヤ私は眼がかすむから宜しい」、「それなら行つたつもりで錢を取つて置きなさい」、「イヤ死ぬ者に錢などは要らぬ」……そこにその家の平和といふものがある。「芝居を觀に行かぬからその代りに切符の代をよこせ」といふことになつて來ると、その家は穩かに行きはせぬ。それと同じ事である。人間は道義心を以て自分の慾望を制御すれば平和が得られる、「まアサウ言はずにお上りなさい」と言へば、「アヽそれは有難う」といふことになる、「こつちへよこせ、食つてやる」と言へば、「ナニ、やるものか」となる、それでは眞の人生は出來はしない。どうも西洋の經濟學であるとか社會學であるといふものが大變進歩したやうに言うて來たことは、どうしても私共には承服が出來ない、この佛教の思想を以て舊いとか黴が生えたとか言ふけれども、さうではない、今尚完全な人生を造るには所謂人間の貪慾心を抑制して、寧ろその反對に布施の心といふか、餘れる力を世に捧げる、金力有る者は金を以て社會に貢獻し、學力有る者は學力を以て、その他いろ〳〵の己れの餘れる力を以て世に捧げて行くといふ風に、お互ひに與へんとする優しい心を交換して始めて世の中の進歩がある譯である。

さうなればこの人生は苦の世界ではない、所謂娑婆即寂光である、それは法華經の自我偈に

『我が此の土は安穩にして　天人常に充滿せり』

とあるやうに、柔は大火に燒かるゝと見る時も我が此の土は安穩であるといふことになる。人生は目覺めざる者の上には非常な苦痛の狀態であつても、信念に依つて目覺めた者はこの人生が決して苦の世界ではない、信仰法悦を以て人生に臨むが故に、外部環境の不愉快な事柄をも精神力を以て征服して行くことが出來るのである。

この信仰の上から人生が良くなるといふ思想は、法華經の壽量品にあるばかりでなくして、やはり一切經を通じた觀念である、華嚴經には『信心は花園を得るが如し』と言つてある、貧乏な裏長屋に居つた者が、非常な廣い庭園を有する家に移つたやうなものである、信仰生活は花園を有する生活であると說かれた如く、さういふ風な意味合が到處に說いてあるのである。阿含經にも同じやうに、信仰に生きる者の人生の歡喜が盛んに說かれて居る。その點は佛教が抹香くさいとか、何か悲哀的のものであるとか考へたのは非常な間違ひである、あれはたゞ一涙の坊さんの聲である、坊さんが慄え聲を出したから惡いのである、何處からあんな事を稽古して來た

か、ナンマイダー〳〵と滅入るやうなことをやる、甚だ宜しくない。お釈迦様は迦陵頻伽の聲と言つて、何ども言へぬ聲の美い鳥のやうに、日本では鶯と言ふけれども、鶯どころではない、モット美い聲で說教をされた、さういふ聲に依つてお經を讀めと言つてある。阿育大王が波斯匿王の妹さんにお釈迦様の聲の調子を聽いて「あなたは釋尊の御教を直接聽かれたさうですがどういふ御聲でありましたか」と尋ねた、すると「イヤどういふ聲といつて、私も若い時分には聲が美かつたけれどもお釈迦様の聲はその時分でも敵はなかつた、今はモウお婆さんになつて聲が嗄れて、お釈迦様の聲の眞似がどうして出來ますか」「誰ぞ眞似をする者がありますか」「ありませぬ」「どうしてもお釈迦様のやうな美い聲は聽かれませぬかナ」と言つた時に、「サア、鳥にチョット似た聲をするのがあります、それは鴜鵒といふ鳥です」と言つた。そこでこれを得んが爲に、阿育大王は國王の力を以て國内に求めて遂にその鳥を得た、なか〳〵鳴かなかつたが、或る時一聲鳴いた、その鳴いた原因を探究したところが、女中が青いやうな上衣を着て居るのがその鳥の側の鏡に映つてそれが爲に鳴いたといふことがわかつた、そこで御殿女中悉く青い服に着更へて鏡の前の廊下を歩かせた、するとそれを見るたびにその鳥が美い聲で鳴いた、阿育大王はその美い聲を聽いて感激に堪へないと言つて喜んだといふことが王の傳に出て居る。それほどお釈迦様の聲は美いのだから、あんな慳え聲や陰氣臭い聲でナンマイダー〳〵とやつて居ることは非常な惡い事である。あんな聲は全廢しなければいかぬ。あれは今の威しの方から行くからあんな地獄に落込んで行くやうな聲を出すのである、「ソラ〳〵鬼が足を引張つて居るゾ」といふやうなことを思はせるからナンマイダ〳〵と悲鳴を擧げて居るのである。そんな事はいかぬ、どうしても人間は清朗なる向上發展して行く聲を有たなければならぬ。

だから佛教はさういふ風に教へられて居る、それが全體である。阿含に於ても非常に人生に悶えて居つた者が、信仰を得れば直ぐに法悅の心に變る、阿含に、或る梵志の妻が梵志の留守中に釋尊の說法を聽いて佛教を信じて非常な法悅に滿ちた爲に、梵志が歸つて來て疑ひを懷いて騷いだ事がある、それから譯を話して、梵志も伴はれて如來の教を聽いて共に歡喜勇躍したといふことがある。それは一切經何處にでもある、信仰に入れば皆歡喜勇躍する。人生は信仰を加へた時に於ては、普通の苦とか普通の樂を超越して非常な麗かな天地をそこに開いて來る。ちようど日蓮聖人の身延の住處の如く、あゝいふ邊鄙な不自由な缺乏の生活の裡に非常な幸福感を懷いて居られた、身延記を讀んで見るとわかる、あゝいふ細かなる庵室ではあるけれども、『檐にすだくささがにの糸玉を連き』、軒端に蜘蛛が巣を張つて居る、それに露が溜つて旭日に光れば實に美しいものである、『帝釋天王の喜見城も斯くやあらん』といふ風に言はれた。又悪樋といつて竹を割つて水を山から引いてある、それに紅葉の葉が映つて居るのを見て、『峰の紅葉いつしか色深うしてたえ〳〵に傳ふ悪樋の水に影を移せば、名にしおふ龍田河の水上もかくやと疑はれぬ』、あまり美しいから天の美人が紅葉見物に來はしないかな、お茶でも沸かして置いてやらうかといふやうな譯である、さういふ風に非常に不自由な生活の中に滿足を謳つて居る所が、それが本當の宗教の人生觀であります。佐渡島に流されて、普通の人ならばあゝいふ僻遠の所に送られて慨くべきだけれども、その佐渡の土を履むや否や『御勸氣を蒙ればいよ〳〵悅を增すべし』と言はれた、餘程前から考へて置いてもあゝは出ない、佐渡島に流されて普通の者ならば「アゝ到頭來たかいナ」と言つて泣くべき所を、御勸氣を蒙ればいよ〳〵よろ

こびを增す」と言はれたことの如きは實にえらい事である、その美しさ何とも言へない譯である。それから佐渡御在島中のあの艱難でも、やはり非常な法悅に滿ちて居られた、だから『國始まりてより流されたる者は多けれども、よも日蓮が如く悅び身に餘るものはあらじ』と言つて居られる。さういふ風に人生が信仰に依つて眺められて來るから、外からは不愉快な事柄でも心にこれを轉じて行く力が現れて來る、娑婆即寂光といふことになる、安國論にあるが如く『三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや、十方は悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや』といふことになり、人生に力强い希望も現れて來るし、非常に人生觀が變つて來る。その說き方が人生の實相を說くといふ點に於て、佛敎ぐらゐ裏と表とをスッカリ說き切つたものはない、それが「いろは」歌にも現れて、この人生は『色はにほへど散りぬるを、我が世誰ぞ常ならむ、うゐの奧山今日越えて、淺き夢見じ醉もせず』、今までは少し夢を見て居つたけれども、その夢が醒めた、チョット醉ぱらつたけれども餘り醉ひ過ぎもしなかつた、その夢が醒めて人生を本當に自覺して行くのである、それには有爲の奧山を越えなければいかぬ、上野の山ぐらゐでまごついて居るやうでは迚も駄目だ。この有爲の奧山を越えるには佛敎の信仰に入れば、有爲轉變の人生といふ移り變りの內に變らない本當のものを發見して、その不滅實在のものに依つて精神の安定を得て眞の幸福を感じ、人生觀が變つて來る。それは法華經で言へば壽量品の所謂我此土安穩の本國土妙の所から來て娑婆即寂光論となり、そこに人生觀の實相が說明されて來るのである。さうしてこれは阿含にも何處にも共通して居る思想である。

## 四、超人的靈格者

次に宇宙の上に佛樣の在ますことを信ずる、これは阿含に於ても既に說かれてあることで、阿含には『肉身滅し給ふと雖も法身在ませり』と說いて、阿含の佛身觀でも、拘尸那城頭に釋尊が入滅をせられた時に、迦葉尊者がそこに居て、肉身の釋尊は入滅せられたけれども法身の釋尊は今もお在でになるのであるから、感應あらせられるに違ひないといふので祈つて、そこに直に感應を得て、喜んで王舍城に行つて阿闍世王と相約して一切經の結集に掛るのである、この肉身滅し給ふと雖も法身在ませりといふことは、阿含の經典の中に到る處に說かれて居ることである。それを法華經では今度の事だけではない、過去久遠の昔、始の根本に遡り、未來常住不滅の所を突止めて、三世を貫き十方に亘つて大宇宙の中に本佛の實在を哲學的に本當に論證されて居るのである。そこでこれを信ずる者は如何なる場所に於ても感應直ちに來るといふことになつて、非常に信仰の對手方がハッキリして來た譯である。西の方には阿彌陀樣、東の方にはお藥師樣……といふやうなことでは、宇宙全體を貫いて考へるといふことにならない、廣い天地全體を貫いてそこに宇宙の中心に本佛釋尊在ませりといふ、洵にそれがハッキリして居ることである。これは人間の哲學思想が進步さへしたならば、どうしても壽量品の敎義に來らざるを得ぬのであつて、西には誰、東には誰といふやうなことは低級な思想である。

この宇宙に絕對者の存在するといふ思想は基督敎にも現れて居る譯である、併し基督敎の言ふ宇宙といふのは非常に小さく見て居るので、神がこの世界を造つたと言ふ、この世界だけが宇宙みたやうなものである。神樣の造つた世界といふものは七日で出來たといふのだから、まア地球ぐらゐなものだらう、それは今の天文學でも認められないことになつて科學の方から嗤はれて居るのである。世界を神樣が造つたといふが、七日の工程に依つてどのくらゐ

のものを造つたか、初めに斯うやつて、あゝやつて……、山が出來て、川が出來て……といふやうな實に幼稚なものである。

法華經の壽量品に於ては十方法界を貫き、三世を貫いてそこに本佛の實在が立證されて居る、洵に立派なものである、その佛も生命の實在ばかりではない、その內容の大智慧、大慈悲、大能力が能く說かれて居る。さうしてその佛は常に吾々に向つて濟度の手を下されて居る、洵に宗敎の本尊といふか、信仰の對象となつて居るものに就ての完全なる說明である。これほど結構な有難いものはない。然るにどうしてこの法華經の壽量品の意味合を見得ないのであるか、法華宗の者でもまご〳〵して居る、帝釋樣がどうぢやとか、鬼子母神樣がどうぢやとか、法本尊がどうぢやとか、いろ〳〵言つて居るが、これは皆何も知らない迷つて居る者だと思ふ、この絕對の本佛の意味合をこれを學問や議論と思つて居るのは愚な話である。大宇宙を眺めてこの尊き御佛の在ますことを考へて始めて佛法の信仰を握り得たものである。成田に行けば不動さんがあるとか、中山に行けば鬼子母神さんがあるとか、そんな建物の中に拘留されて居るやうなものは駄目である。十方法界到る處本佛の大慈大悲の感應にあらざることなしといふことがハッキリ現れて來なければならぬ。

さうしてその慈悲の本源を、諸法實相のたゞ眞理でなく人格の實在に移して、大慈大悲の佛の吾々を濟度する所の如來秘密神通の力と說き、圓慈の慈悲を以て一切衆生に臨んで居られることを說いて、遺憾なく實相の大眞理を提げ來つてこれを人格の上に現した、モウ何も殘る所は無い。これを動もすれば佛と言つても佛の上に法があるとか、佛の外にまだ眞理があるとか、何かえらいものがあると思ふけれども、この大宇宙の大眞理、絕對を提げ來つた儘に人格を以て現れた、この佛の慈悲に感孚する場合に何も他に殘る所は無いのである、實に尊き有樣のものである。ちようど日本の御皇室が、御皇室と陛下と一體で在らせられる、その一體に向うて忠誠を捧げる時、國家をそこに體現されて居る、國家といふ全體と陛下の御一身とが一つに現れて居る、陛下に忠なる外に日本の國を思ふといふ事はない、君の爲め國の爲めと二つ言はなくても、大君の爲と言へば、モウそれで宜い、「天皇陛下萬歲」と言へば、「大日本帝國萬歲」といふことを言はなくても宜しい、その陛下の御一身を以てそこに國家を表現するのである。それと同じく本佛釋尊を以て大宇宙の諸法實相を表現して、さうして釋尊に依つて一切の滿足を得るものである。日本の國がさういふ點で優れて居るといふことは、今日思想研究の上にだん〳〵諒解されて來て居るのであるが、それよりも壽量品の方はモット原則的に能く說かれて居つて、その尊さがわかつて居る、佛敎の方が手本ナンであるけれども、佛敎徒が熱心が足らないものであるからわからないのである。日本では、國といひ、天皇といふものは二つでないといふことがだん〳〵諒解されて明かになつて來て居るが、法華經の方ではそれが薄くなつて來て居る。これは不熱心にして無學、無道念な者が多い爲に、斯の如き結構な御敎がその光を失ひつゝあるものであると私は斷言するのである。さういふ結構なものが玆に在る、日蓮聖人が身命に換へて法華經でなければならぬと言はれて開目鈔を書かれたのは其點である。

## 五、感應利益

そこでその力は直ぐ感應といふことに現れて來て、吾々が佛性の目覺めよりして感心して掌を合せるやうな心になり、本佛は慈悲の力を以て吾々に應じて下される、月は降り下らず、水は昇り上らずしてチャント池にお月樣が映るやうに、吾々の心はこ

の身の中にある、佛はいづれに在ますか、その遠近はわからぬけれども、如何なる所にござつても直ちに大慈大悲の感應を起すのである。ちようどラヂオのやうなもので、その波長が合ひさへしたならば直に響いて來る、信仰の心を通して法華經の教、日蓮聖人の御示に遵ふといふのは、恰もラヂオの機械の波長を合すやうなものだから、それが合へば本佛はいづれにお在でになつても直ちに大慈大悲の感應を生じて響いて來る譯である。その機械の波長が合はなければ、隣りでラヂオ放送をやつて居つても聽えない譯であるから遠近は問ふ所ではない、自分の心をその方に向けて、佛樣の大慈大悲の有難い事を感奮するやうな氣分に和いで來れば、そこに波長が合つてチャント響いて來る。

その實例を言へば日蓮聖人の信心せられた如く、龍の口の頸の座に於ても、本佛の大慈悲來つて、頸劍ねんとしても頸は斬れないといふあの驚くべき事蹟を現した、『一丈ばかりの光り物、江の島の方より飛來り』といふやうな事が起つて、『太刀取眼くらみ倒れ伏す』といふので、遂に日蓮聖人を斬ることが出來なかつた。佐渡島に於ても、縱ひ千尋の海の底の石は浮ぶとも生けて再び日蓮は鎌倉に歸さぬと北條氏は言つたけれども、海の石は浮ばぬ中に日蓮聖人は生きて鎌倉に歸つた。さういふ風な感應といふものは總てに現れて居る。それを無暗矢鱈に病氣が癒るとか、のらくらして居つても商賣が繁昌するとか、さういふことに濫用してはいかぬけれども、愈々一大事の頸の座に坐り給うた時、不思議の感應といふものは必ずあるのである。日蓮聖人自身は『頸斬るべくば早く斬るべし』と言はれて居るけれども、「茲は斬らしてはいかぬ」といふ本佛の感應が來つて、太刀取眼くらみ倒れ伏すといふことになつた。それは頸が斬れたつて何もどうといふことはない、日蓮聖人も法華經の御爲に身命を拂げると言うて居るのであるから……、けれどもこれが斬れないのも面白い、私はどつちでも宜いと思ふ。『頸斬るべくば早く斬るべし』と日蓮聖人は言はれて居る、そこに感應が來るのである。佐渡島に於ても隨分危ない事がたび〳〵あつた、又容易に生かして還すといふことは無い有樣であつたのが、御無事で赦免になつて鎌倉にお歸りになつたといふ所に本佛の大慈悲の感應があると見なければならぬ。これを濫用してはいかぬ、感應といふことを濫用すると迷信になり害毒が起る、併し一大事の時分にはさういふ人力を超越したる奇蹟感應といふものは宗教から除くべきものではない、又事實あるものである。そればかり言うて居るからいけない、宗教といふものはちようど人間に體温といふものがなくてはいけないやうなもので、温が無くなつたらそれは死んで居るのである、けれどもこれが三十七度を越し、八度となり九度になれば熱が出たと言つて騒ぐことになる、これが又三十四度となり三十三度といふことになれば危ないものであります、先づ三十六度を中心にして、三十六度二分あるか三分あるか、或は三十五度八分あるか九分あるか、その間は病氣といふものではない、健康體ナンである。それと同じやうに宗教に於て感應を信ずることも、その程度といふものを誤らぬやうに、三十六度を中心にして考へなければならぬ。女房が南瓜を食ひ過ぎて腹痛を起した、「一つ拜んでやれ」……さういふ風に信心を濫用してはいかぬ、そこが素人の間違ひ易い所である。だからさういふことを表にしないで、終日祈つて感應が無くとも我が信仰に於ては少しも影響を受けぬ、天台大師が言うて居るやうに『終日祈れども終日感無し、終日感無けれども終日悔無し』といふことでなければならぬ、一日祈つて何等の證明が顯れなくとも我は少しも後悔する所は無い、感應のあることを確信して行くと言はれた。日蓮聖人の開目鈔にも『天もす

て給へ、諸難にも値へ、身命を期とせん」とある、諸天善神が護らなくとも、あらゆる災難が競ひ來らうともさういふ事には關係しない、正法を信じ正法を護つて進むことに於ては間違ひの無い所であると仰せられて居るが如く、そこが本當の宗教である。詰り日本人ならば日本人としての正しい考を以て、國民の道德に背かぬやうに善良な生活をすれば、それは警察も護つて呉れ、憲兵も護つて呉れ、愈々となれば誰も彼も護つて呉れる、それを一々「私は正直にやりますが署長さん護つて呉れますか」……一々そんな事を言ひに行かなくても宜い。「最早一箇月も嘘も吐かず商賣を勉强して居るが何か證驗がありさうなものだ、一つ伺つて呉れませぬか」……そんな事を言ひに行くべきものではない、正々堂々と正しき教を信じて行くべきものである。とかく日本人の宗教に入る人は非常に卑しいのである、「一月も信心をして居つたら何か來さうなものだ」……それはちようど「一月も正直にして居つたら煎餅の一袋も遇査が配つて來さうなものだ、それが來なければ警察が護つて呉れたものでない」と思つて居ると同じである。さういふやうな下らない觀念を捨てゝ正しき信念を有つて行けば、感應といふものが必ずあるのである。

## 六、精神生活の中軸

さうしてその感應の一番大きいのは、さういふ物質的の物を貰ふといふことよりも、己れ自身の人格を改造して行くことである、信心に依つて自分の惡心が衰へて善心が盛になる、癇癪の强き者はそれが鎮まり、のらくらして居る者は働くやうになり、嘘を吐く者は吐かぬやうになるといふ風に、人格上の缺陷が信仰に依つて矯されて行くことが、それが本當の御利益である。さうして幸福も自らその中にあるのである、たゞ幸福だけを狙つてさういふ人格の改善されて善根功德の積まれて行くといふその根本を考へないといふことは幼稚な人の考である、能く働いて金を儲けて貯金をして置けば、その金が何かの時に役に立つのである、金を儲けてスグ牡丹餅を買はぬ、壽司を買はぬからと言つて決して不幸ではない、その金を毎月積んで置くことに於て決して無駄なものではない。けれども幼稚な者は、例へば子供や無學な女中みたやうな者であつたら、時々貯金箱から出して煎餅でも買つて食はないと、「使はぬ金なら溜めない方が宜い」といふことになる、使はぬ金といふことはない、入用の時が來たら使ふのであるけれども、それがわからない、「せめて半分でも壽司を買つて食はして呉れませぬか」と言ふ。ちようど今の日本の宗教の信者はそんなやうなものである、前途にさういふ立派な御利益があるのにそんなことは忘れて、少しでも宜いから何なりと今呉れと言ふ、ちようど女中や子供みたいナ低級な者が一パイ居る。佛教は高等なる宗教として、感應といふことに就ても非常に能くこれを說かれて居る、本感應妙といふことに就ては曾つてお話した事があるが、その本感應妙の意味を徹底して說かれたことに於て、佛教は基督教の聖靈の感應といふやうな事よりもモット完全して居るものだといふことがわかるのである。

それからその感應を受ければそこに所謂御利益といふことが自然にハッキリして來るから、精神生活に入ることが出來、歡喜の心が湧いて來る、それは法華經には得益歡喜といふことを說いてある、さういふ御利益を受ければ直にお經の方では歡喜段といふものがあつて、歡喜をズット述べるのである。方便品を聽いて舍利弗が華光如來となればそこに歡喜段があつて、舍利弗は「今まで自分は大變考へ違ひをして居りました、佛の愛子であつたことを知りませぬでした」と言つて非常な歡喜の精神をズット述

べて居る。四大聲聞が利益を受けては、又それに就て、長者の息子が迷つて乞食になつて居つたのが、許されて親の家に歸つて財産を繼ぐといふ譬を擧げて歡喜を述べて居る。藥草喩品には枯れナンとする草が雨を得て潑剌となつたが如きものであるといふその歡喜をズツト述べる。壽量品の次には彌勒菩薩が『歡喜身に充徧せり』と言つて、この壽量品を聽いての歡喜は心ばかりでなく、身中に充徧して抑へることが出來ないと言つて歡喜を述べて居る。斯の如く法華經の全部、その終りに至つては『一切大會皆大歡喜』といつて、一會の大衆皆大歡喜を得たりといふことがある、その歡喜といふものは非常な御利益であります。人間はウカ〳〵して考へて居るから目前の何かチョツトした事が善いやうに思ふけれども、永遠といふことを考へ、無限の生命を考へ來る時に宗教ぐらぬ尊いものは無い。何と言つても人生五十年七十年は過ぎ去れば夢の如きものである、モツト價値の有るやうに考へて見たいと思ふけれども、終りに達すれば實に五十年七十年は夢なきものである。だん〳〵年取つて死に近づいて居る人もあるが、その人に聽いて御覽なさい、「いろ〳〵な事があつたでせう、うまい物も澤山食つたでせう」「それは壽司も食つた、鰻も食つた、その時には美味かつたけれども、今から考へて見れば澤庵食つたも牡丹餅食つたも同じことです」と言ふでせう。何遍牡丹餅を食つて何遍澤庵を食つたといふことを考へては居ない、牡丹餅が多からうと澤庵が多からうと唯その時だけのものである、いろ〳〵の事があつたけれども過ぎ去つてしまへばあれも夢、これも夢、だん〳〵稀薄になつて行つて最後の時考へたならば何が殘るか、「花の如き娘を嫁に貰つたがそれも婆さんになつて齒が拔けて、最早や死んでから十五年になります、お墓も震災でひつくり返つてしまつた、モウ一遍建てたいけれども錢が無い」といふ譯で、華やかなりし事も、苦しかつた事も、だん〳〵考へて見るとフワ〳〵と煙の如くになつてしまふ、けれどもその最後己れといふものはまだ殘つて居る、どうしても己れが殘る、老いたりと雖も己れは益に生命を有つて存在して居る。その己れが死と共に消えるか永存するか、永存するとしたならばどういふ關係になるかといふ問題は最後の最後まで殘される、今や息引取るといふ時になつて「サアどうぢや、安心して居るか、行先がきまつて居るか」「まだきまつて居りませぬ」……それでは到底いかぬ。宗教のこの永存の生命に關する教を奉じて安心立命して居らぬ者はどうしてもまごつくのである。

だから人間は平生から信仰の歡喜といふものを鍛上げて置かなければ駄目であります。諸君もそこを能く考へて置けば宜しい、他の事を喜ぶなとは言はない、壽司を食つて喜ぶも宜い、併しこれは消える、信心して有難いと思ふ、これは消えない、今はボンヤリして居るけれどもこの歡喜が遂に華を開く。この法悅歡喜の上に於てのみ己れの永遠の幸福はある。女房の顏を見て嬉しいと思ふのも、「お前の顏を見て美しいと思ふのもいつか消えてしまふ、佛樣が有難いと思ふこの歡喜は消えない、そこが違ふ」といふことを、さう一遍々々言はなくても宜しいけれども、十分に心に列んで置かないといふと宗教の信念が增進しない。日蓮聖人はさういふ點がハツキリして居る、その歡喜の絕えないやうな生活を續けて行かれたのであります。



## 七、道義の實行

さうするとその中に自然喜んでばかりは居られませぬから、自ら善根功德の心が發つて來る、法華經で申せば菩薩の行に入る譯である、これが實に有難い事であります。茲に至れば善を行うて喜び、喜んでは善を行ふといふ、實に愉快な生活を展開して來

るのであります。困る事はあるけれどもそれはそれとして、如何に自分が心配の事があり、困る事があつても、それは人生の事、最後死すれば總勘定が附いてしまふ、幾ら借金があつても死んでしまへばそれつ切りである、踏倒す譯ではないが取りに來られはせぬ。「子供にも斯うしてやりたい、女房にも斯うしてやりたい」と言つても死んでしまへば出來ない、喧嘩をしに來ても墓に石を投げても痛いことはない、結局はそこに人生の終りといふものに達すれば、宗教的の信念のみ己れと共に滅びずして行くのである。出來るだけはやらなければならぬけれども、出來ぬ事をもがいて苦んでも仕方がない、それは所謂人各々果報の力もあるものであるから、宜い工合にして置いてやつてもまごつく奴もあり、それほどにせぬでも立派にやつて行く者もある、親どして盡すべきことは盡すけれども、足らない所は耐へて呉れといふことで措かなければならぬ。千圓ならば千圓は溜めて置くけれども、千圓では食つて行けない、せめて五千圓ぐらゐにして置きたい、泥棒すれば五千圓にすることも出來るけれども、そんな事をすれば危ない……といふので悶え苦しむのである。世の中の首を吊つたり身を投げたりする人を見ると皆まごついて居る、子供を中學校へやつて居つたのが、自分が職を失うたが爲に學資金が送れないと言つて首を吊つて居る、そんな事は愚な事である、送れなくなつたら送れないといふことを能く言うてやるなり、子供を呼び寄せるなりして言うたら宜い、「父は今日まで職を得て居つたけれども、不幸不景氣の爲に職を失つてお前の學資金が送れない、途中で學校を廢めさすのは可哀さうだけれども、併し奉公してやるなり、新聞配達をしてやるなり一つ奮發して呉れ、俺も遊んでは居ないけれども……」といふやうに有の儘に正直にやれば宜い、それを虛榮的に、今更金が送れないといふのは體裁が惡いといふ



ので首を吊る、そんな事をすれば子供は吃驚してしまふ、ナニも學資金ぐらゐ送らぬのは驚かぬけれども、親父が首を吊つたと言へば生涯首吊の息子と言はれなければならぬ。或は近頃の新聞にもあつたが、娘が身持が惡いと言つて品川の小學校の庭で首を吊つた親父がある、娘の不身持で親父が首を吊つても仕樣がない。さういふ點に於て現代人の觀念といふものは實に氣の毒なものである、それは法悅よりして菩薩行に入るといふやうな氣の利いた事がちつとも教へられて居らぬから起るのであります。

法華經ではその菩薩行のことが不輕菩薩に依つて能く說かれて、如何なる人間でもそこに目覺めなければならぬ、不輕菩薩があらゆる人を禮拜して菩薩行に進むべく覺醒を促した、あの不輕禮拜の行といふものを見れば、法華經が如何に人間を價値づけて、さうして發心信仰よりして菩薩行に入つて行くべきかといふことの鮮かな證明である。涅槃經に進んで行つたならば菩薩行の意味合といふものは洵に廣汎なもので、六波羅蜜の行、如何なることに於てもそれが皆菩薩の行となつて居る、何も難しいことではない、普通の生活の中に菩薩行が一バイある、僅かな親切をするのも皆菩薩行である、夫婦の間にも菩薩行あり、親子の間にも菩薩行あり、一切を菩薩的精神に依つて導いて行く、所謂行佛性の顯現、これが菩薩行となつて居るのである。その大なる所に至つては日蓮聖人の如き大活躍を爲すことが出來る譯であつて、どんな大きなものにも行くし、又ホンの小さな親切の心としてもはたらくのである。

## 八、人類文化の最大要素

左樣に人が皆菩薩行を行ずるやうになれば、世の中は自然に善くなつて來る、法華經の化城諭品に

世尊未だ出でたまはざりし時は
十方常に闇瞑にして

三惡道增長し　阿脩羅も亦盛なり
諸天衆轉減じて　死して多く惡道に墜つ
佛に從うて法を聞かず　常に不善の事を行じ
色力及び智慧　斯等皆減少す
罪業の因緣の故に　樂及び樂想を失ひ
邪見の法に住して　善の儀則を知らず

と說かれて居るが、これ等人生に現れて居る事柄が皆矯正されて來る、三惡道といふ地獄、餓鬼、畜生のやうな淺ましき人生の相が消えて、そこには娑婆世界でありながら淨土の面影が映つて來る。『三界は皆佛國なり、佛國それ衰へんや』といふ風に、人生の中に非常に美しい世界が造られて來る。或は如說修行鈔にある通り、『吹く風枝を鳴らさず、雨土くれを壞かず』といふ、さういふ平和な文化が啓發されて來る。人が皆菩薩行の精神に入つて奮勵努力するやうになれば、社會、國家、人類が善くなるに違ひない、即ち

佛は世間の眼と爲りて　久遠に時に乃し出でたまふ
諸の衆生を哀愍するが故に　世間に現じ
超出して正覺を成じたまふ

といふ法華經の文は最も明瞭であります。お釋迦樣はたゞ個人の事だけを心配せられたものではない、廣く言へば世間の眼となり、而も世間に現じて世間を超出し、正覺を成じて世間を善導した文化建設の大導師である。チョット考へれば西洋の學者が何かうまい事を知つて居るだらうとか、儒教とか神道とかお役人とか、そんな連中が知つて居るだらうと思ふけれども、それは大した事を知つて居らぬ、西洋の哲學者も屁理窟ばかり言うて碌な者は居らぬ、政治家と言つてもたゞ表面の利害を考へて動いて居る。この大なる人生を永遠に如何にするかといふ問題に對しては、今尙釋尊の敎說が一番完全して居るものである。

だから人類文化の一大要素として觀る場合にどうしても佛敎を尊敬して行かなければならぬ、日本をこれから善くするといふに就ては、無論政治經濟でやつて行くのは宜いけれども、さういふものだけを威張らして居つては駄目である、佛敎の正しき意味合を發揮して、先づ國民に人間の本體、人生の實相を知らしめ、宇宙には超人的本佛の存在を信ぜしめ、兩者の感應利益を明かにして、さうして國民が精神的生活の法悅を得、道義的感情を養うて罪を改め善を行ひ、而してこの佛敎の敎化を通して日本の文化を大成しようと考へたならば模範的の國家が出來る。さういふ法國相合した模範的の國家を以て世界を指導し、遂には人類の文化を完成するところの大きな活動を爲す、それが取も直さず日本國の使命であり、佛敎の根本念願である、この法、この國、相合してその偉大な仕事を成し遂げなければならぬのである。

これを要するに宗敎の本質より觀たる佛敎が、その儘人類の文化を完成する佛敎として役立つ譯である、同時に又護國の佛敎として役立つ譯である、護國といひ、或は文化指導と言つても何も別に變つた事ではない、宗敎の本質なるものはその儘國の爲め世の爲になる譯である。宗敎などは別なもので、世の爲め、國の爲といふには何か他の事をしなければならぬと思つて居るのは大きな間違ひである。その敎を明かにし、その敎を盛んにし、その敎を通はして以てこれが世を益するのである、經濟問題だからと言つて、經濟學者が言ふやうに算盤の中に入つてからのみが經濟ではない、大なる經濟といふものは經濟學を超越して居る、即ち人間の根本を斯樣な淨き信念に措き、さうして人間そのものを理解し、人生を理解し、宇宙を理解し、大なる道念、信仰の下に人間が活躍するといふ所から考へたら本當の經濟

學が出て來る。その根本が間違つて居つて、さうして自分の利慾の爲に引奪り合をするといふやうなことで行くから、如何に巧妙な經濟學を組織しても土臺が腐つて居る、地形をしないで家を建てゝ居るやうなものであるから、チョット地震がゆるとグラ〳〵と動くやうなものである。經濟學ナンといつても人生をモット根本から觀なければ到底うまい話は出て來る筈がない、一軒の家もやはりその通りで、たゞ家の内で行儀作法などを教へて、朝早く起きろとか、あゝしろ斯うしろと言つても、根本の魂を鍛上げるところの宗教道德のその根源を考へなければ駄目である。娘にお辞儀の仕方は斯うする、お茶の立て方は斯うするといふやうな事を教へて、一通り氣の利いた人間になつても、魂に於て眞の人生觀、高等なる理想といふものを與へて置かない限りには到底立派な家庭は出來ないと同じことである。人類の文化を造り成すところの根本觀念といふものは、高き宗教、哲學、道德の根抵から教へられるので、政治や經濟はおとなしく膝の上に手を置いてこの教を聽くやうな文明を造らぬ限りには、永遠に完全なる人文は現れ得ないと信ずる次第であります。

（完）

## 野口上人世界巡錫第二回後援會

目下佛國巴里に滯在中の野口上人の印度入は本年末頃と相成可申六十餘歳の師が單獨異域に布教されつゝあるを遙察し、茲に本會を起すの不得已場合に立至り申候何卒左記御諒察の上宜敷願上度候

發起人一同

一、後援募集金額　金三千圓也
二、勸募期限　昭和五年九月卅日限
三、送金方法　統一團振替口座東京一二一番

但し必ず野口上人後援と御明記の事

# 不況の對策は靈肉不離の合理化

醫學博士　石田誠

人間は努力である、眞理は常に平凡陳腐だが不斷の生命である。

最近土佐の山岡と云ふ篤農家が多年苦心慘憺の結果、二期米作に成功し、本年六月二十七日七反の田より一期米を收穫し、市場に賣り出したと云ふ事を聞いて、誠に愉快に感じた近年打續く不況のため貴賤貧富の如何を問ず、健康者も病人も均しく悲鳴をあげてゐる。而し乍ら私に云はせると今日多數の人々が徒らに不景氣だとか、失業だとかと悲觀して居る事は、寧ろ自己の怠慢を暗示する標語に過ぎないと思ふ。銘々が各自の天職にさへ努力すれば、不景氣も失業も決してないと確信する。それは健康人でも病人でも同じ事である。我々は土佐の山岡氏に倣ひ精進努力してこの不況、不景氣の難局を打破しなくてはならぬ。これは各自の決心一つである。

△　▽

南米ブラジルでは一人當り耕地が三十六町歩だと云ふに、本年四月三重縣廳の調査に依れば、縣内一人當り耕地は十一坪餘りで、桑名町の如きは一人當り面積僅かに半坪に過ぎない狀態である。

日本人は世界中死亡率も借金も一番多いが、その個人の所有や所得は最も僅少である。此の上人間が益々增加したならば一體日本はどうなるであらうか、この有樣では豐葦原瑞穗國の前途も甚だ心細いものである。

昭和五年六月三十日迄は一町歩の田地で家族が漸く喰ふて來たが一ヶ年毎に增加する家族の多くなるに從ひ、一家を支へる事が出來難くなる。

△　▽

明治維新以來帝國の領土は約二倍になつたが人口は今の處、未だ二倍に達して居ないと云ふ者があるが、實際利用化された耕地が何程殖へたかは疑問で

ある。我々は全く針金の上で綱渡りをして居る樣なものである。此の國難を打開すべく奮起した山岡氏が、日本田地で米を二回收穫さるゝ事に成功した事は我國食糧問題の經史上特筆大書すべき不朽の事柄である。

土佐の山岡氏が一年に二度、米を收穫したと同じく私は私の努力に依つて、從來一年に一度しか咲かなかつた草花を、二度も三度も咲かせ得る事を經驗した。

又昨年十月頃櫻の返り花が澤山咲いた當時研究した結果にすれば返り花の咲く櫻の樹には無根が非常に多いが、咲かない木にはそれが少ないと云ふ事實を發見した。

これで人間がよく注意して努力さへすれば、櫻花でも滿足に年二回咲かせる事が出來る確信を得た。無情の草木でさへも、自ら努力して無根を澤山出して二度も花を咲かす樹と、又之れをしない木とがある事は、充分味ふべき眞理が含まれて居ると思ふ。

此の事を本當に考へて病人も、健者も同じ樣に各自の與へられたる勤めに向ひ、充分に努力さへすれば從て國家を完全にする事が出來る。

△　▽

今年は果物の出來が惡い。これは天候の關係であると云つて了へばそれまでだが、栽培者の努力に依りては何程が自然に對抗して、その災害を防止する餘地があらうと思はる。

我々が健康者なると病者なるとを問はず、ベットの上で終日天井を眺めて考へる事は、概ね無意味な懷想に過ぎない事が多い、それは間違つてゐる。この怠惰な氣分が今日この社會の不況とが、思想の惡化とかを招來するのである。

政治家がより良き政治を、宗教家、教育家がよりよき人間を、藝術家がより良き作品を、農業家がより多き收穫を、工業家がより安き良品を、病人がより速に健康の回復を各自が、夫れ〳〵努力さへすれば、これを小にしては一身一家を安寧繁榮ならしめ、これを大にしては國家社會の興隆を增進する事となる、如斯はお互に國家を形成する國民に與へられたる最高の義務である。

△　▽

藝妓の持つ三味線は僅か三筋の糸に過ぎない。而し之れを操る指頭の努力如何に依つては、あらゆる音樂を調和し、喜怒哀樂の七情を自由に左右する事が出來る、藝妓が三筋の三味線の使ひ分けを心得て居る如く、病者はその病氣療養中にこの病氣は如何にして、治すべきかと云ふ事を研究し、健康の回復に努力することが即ち、その與へられたる尊い運命であり義務である。

病氣は醫師が治して呉れるものとのみ思ふ考へは間違つてゐる。一條の綱に縋つて天に昇る人は外見上、恰も綱の力によつて昇る如く見えるが、而し乍らその人に綱に縋つて天に昇るの努力がなければ何んにもならぬ。

慈母が愛兒に哺乳するとしても肝心の愛兒がこれを飲み之れを消化する能力がなければ何んの營養にもならぬと均しい。

△　▽

依賴心は破壞の源である。健康なる精神は、病氣を治して健全なる肉體とせねば熄まぬ之れが人間の天性である。

病氣なる現象は畢竟人間の體内に於ける「カルチウム」の缺乏によりて生ずる、一時的現象に過ぎない。即ち血液中に〇・〇一以上の存在を失なつた時の現象である。

不景氣と云ひ失業と云ふも畢竟は人體の缺陷と同じく經濟上の「カルチウム」が缺乏した社會的現象である。

世間には此の不況切り拔け策を、一にも二にも政府の保護とか救濟とかに求めんとするが病者も同じく依賴心は萬事の破壞である。そんな量見でこの不景氣病や失業結核が治るものではない。

△　▽

一體日本の教育の方針が誤つて居る。我國では尋常六ヶ年を義務教育としてゐるが、學校を出れば獨力で、夫れ以上向上しようとしない。獨乙では中等學校が義務教育であるから車夫でも女中でも、大學卒業生が云ふ事、話す事が悉く判るだけの智能を自ら養つてゐる、又キール醫科の學生は、チブス患者も見た事がないと云ふが、これは衛生思想が發達普及して患者が少ない結果である。

△　▽

我々日本人に「カルチウム」が少ない理由は果物を一つ食するにも營養價のある皮を捨て營養價の少ない肉だけを好む習慣に徴しても明白である。日本人の頭は斯くも衛生思想に乏しい。魚類でも刺身にして、最も營養のない處を賞味して得意になつてゐる。

更に宗教的に云ふならば靈肉不離の信念に乏しい。宗教上の信仰と安心立命とを持たない人間の肉體がその精神と同樣極めて弱い事は當然の歸結である。

△　▽

今日の政治家は盛んに産業の合理化を唱へてゐるが、一體精神を離れて何處に産業の合理化があるのであらうか。人間の機械化、化石化これが現代政治家の云ふ産業の合理化である。こんな不合理な事はない。

奈良の法隆寺を建立された聖德太子はこれに依つて、思想問題を善導し、同時に肉體の健全をも計り、産業の勃興を期し、靈肉不離を政治的に錄史された。

△　▽

徒らに失業々々と叫ぶ事は、諸外國に聞へても誠に恥しい次第である。獨逸を御覽なさい。大戰以前よりも産業上の能力をウンと向上して居る。夫れは失業者が優秀なる機械の發明に努力した結果である。一の新機械の發明により十人の職工が三人で事足り殘る七人の中の一人が更に、先きの發明よりも能率の良い新工夫を凝らして成功する。後に殘された六人の失業者は更に前者に劣らぬ努力を續ける。これが獨逸の産業復興の原動力である。

△　▽

産業の合理化と云ひ、能率の增進と云ふもその第一義は思想上の努力奮鬪に出發する。米を一年に二回收穫し、一度咲く草花を二度も三度も咲かせる樣に、人間の尊い努力の必要である。

今日だん〳〵思想が惡化すると云ふが、學校で修身の講義を十回聞かすよりも、肉體上の勞作を前提とする精神的努力を實行させる方が遙に思想を善導する。机上の議論も一つの實行を伴はずんば無意義



である。政治も、經濟も、療養も亦その通りである。

△　▽

肺患に惱される悲しみより以上確固たるものでなければならない。醫學が進歩するに從ひ、結核菌は他の菌の如く之を驅除する事は絶對に不可能だと云ふ事が明かになつて來た。その理由は桿狀菌なる結核菌は人間の最も肝要、最も微妙なる肺臟と云ふ金城鐵壁に隱され時々毒素を出して、人體を腐蝕して居るのだから、之れを驅除するには體外では易く死滅させる事が出來るにしても體内で之れを死滅させる事は本當に困難な事であると云はねばならぬからであるこの行き詰りは結核治療上の特効劑は心身不二の療養合理化より外にない。

△　▽

結核菌より怖ろしい一つは國民病の思想惡化である。失業者を救ひ、破産者を救ふ方法の確立して居ない行き詰つた今日の社會は私の專門的立場から考へても結核菌と同じく、彼等は生きる爲め、食ふ爲めには惡いと知り乍ら泥醉でもしなければ、その生命を保ち、肉體を守る事が出來ない狀態にある。之れが緻密になればなる程、その手段が巧妙になる事は、恰も結核菌が撲滅技術の進歩に比例して巧妙にその病毒は傳播するにも均しい。

△　▽

この社會的肉體上の病原を豫防し、失業其他の病氣を治療するには、どうしても精神的方面より信心力を旺盛にして、靈肉不離の合理化を提唱せねばならぬ。

戰慄すべきは物質上の不況よりも、精神上の不況である。現在の儘に放擲して置けば將來、必ずや不祥なる動亂が起るかも知れぬ虞れがある。恐るべきは益々深刻化する不況に依りて、激增する失業者よりも夫れ等の人達の間に國民的努力の精神が缺乏して行く事である。

△　▽

山岡氏が年に二度米を穫る努力も、私が花を三度咲かせる努力も患者が病氣を一日も早く治す努力も政治家が救世福民の大業を完ふする努力も實業家が殖産興業を期する努力も、其源は悉く報恩報志の宗

教的信仰上の精神から生れる。草花を栽培するに、遲れて居る花をよく調べると、矢張り何處かに努力を缺いて居る點を發見する。各人自ら自己の努力の足らざるや、否やを、反省し、精神的に肉體的に一段の努力を要する事は、これ子として、これより父母に孝なるはなく、民としてこれより君國に忠なるはない。私は此の見地によりて現代の世相を觀る毎に努力を生命とする靈肉不離の合理化を絶叫せざるを得ないものである。（七月三十一日脫稿）

## 教報

### ◎東京統一團本部教報

八月は例年の通り暑中の爲巡回講演は休會、その代り道路布教を三の日の午前中上野公園でやつてゐる（これは年中無休）

△八月三日（晴）上野公園忍坂上　午前十時開會、出席講師、綱引弘氏、梶木顯正師、大園庄太郎氏、松岡林造氏、磯部滿事氏等の五氏、外に助手として村田顯明君奉仕す、當日聽衆八十餘名、施本「正法、教」等百部

△同十三日（晴）上野公園　同上　道路布教、出席講師、梶木顯正師、松岡林造氏の二氏他に助手として東洋大學生村田顯明君奉仕せり、暑さ暑いがそれでも熱心に說けば亦聞いて呉れるものだ、當日なぞ海軍の水兵がかなり大多數聞いて居て呉れた、來會數百餘名、施本「感想」百部

△同廿三日　上野道路布教　同上　出席講師、梶木顯正師、和賀義見師、磯部滿事氏にて村田顯明君助手、施本「教」數十部、暑い日盛りの長廣舌に惑じた一老翁左の短冊を殘して行つた。

炎天の下に聲をかちし法を說く
獅に孝給わらん神も佛も

### ◎正法寺便り

「牛込區早稻田南町」

△例會毎月第二日曜日（午後七時）

八月十日例會　聽衆六十餘名、風無く非常に蒸す夜であつた。講題及講師

正に是れ時　　椎野　乾政氏
佛教と現代思潮　　眞正　木村　日保師

○通告九月十四日第二日曜日午後七時講題及講師　會場正法寺

強く生きる道　　大園庄太郎氏
放逸と精進　　猪又金太郎氏
安樂行に就て　　眞正　木村　日保師

### ◎京都活動誌

△六月二十日夜　烏丸町にて街頭布教、先ず長谷川泰學師開會を宣し次で藤本成師明治以來の日本文化を概述して佛教の必要を論じ、次で大塚正芳師聖德太子と佛教に就いて述ぶるや直ちに長谷川泰學師熱弾の知き大音聲にて佛教は世界第一の宗教なる所以を論ず、次ぎに河合陟明氏あの熱あり而も學理的なる佛性論を述論し、次で藤山本成師世間慣れたる音調にて汗玉を流らしつつ本多日生猊下は當世日本第一の宗教家なり、日本第一は世界第一の宗教家なりと高論し廿二日の大講演會には是非來聽を望むと宣傳す。最後に正法興立皇道繁榮を新願して十時半閉會、當日聽衆多き時は一百五十名。

△六月二十一日　寂光寺婦人會　於寂光寺講師は出主上田智量師

△六月二十二日　聽講會午後五時より妙滿寺方丈にて、「法華部講義」　本多日生猊下

△六月二十二日　京都統一團支部主催日蓮主義大講演會　午後七時半より妙滿寺講堂にて當日聽衆四百餘非常に盛會なりき。

一開會之辭　　益光　孝碩師
一實際生活と佛教　　本多日生猊下
一閉會之辭　　有田　宏道師

△六月二十三日　立正統一會午後七時半より妙泉寺本堂にて。

一最後の戰訓　　藤山　本成師
一感恩慈愛の生活　　長谷川泰學師

△六月二十七日　小善庵にて　午後七時半より。

一不惟身命　　藤山　本成師
一正しき佛教　　長谷川泰學師

△六月二十八日　日什大正師御命日法要、午後二時より妙滿寺にて、讀經後土持良達師、有志者に讀經の教授。

△七月一日　「國聽會」午後本山にて、講師は「正しき宗教」聖照玄師、夜は藤山本成師、當永東一郎氏兩人にて出町街頭布教。

△七月三日　「立正統一會」夜七時半より妙泉寺本堂にて、講師上田智量師。

△七月七日　夜小善庵にて

一開會の辭　　藤山　本成師
一佛教の綱格　　上田　智量師

△七月八日　「護正婦人會」午前八時より成就院にて、生活の三樣式　有田　宏道師

△七月九日　「正行婦人會」午前九時より正行院にて、法華七喩　川崎　英照師

△七月十一日　午後七時半より妙滿寺方丈にて、佛遺教講義　川崎　英照師

△七月十三日　午後二時より妙滿寺本堂にて法華經要文講義　川崎　英照師

△七月十五日夜　烏丸町にて街頭布教「宗教の必要」當永東一郎氏、「宗教の選擇」藤山本成師、「正しき佛教を知れ」長谷川泰學師「佛教と日本國」河合陟明氏。

△七月二十二日　「久遠寺婦人會」午前九時より久遠にて、講師は吉塚遍映師。

△七月二十七日　夜小善庵にて

一喜捨　　小倉　恒司氏
一四箇格言　　藤　照玄師

△納涼日蓮主義大講演會

時代は眞實に宗教を要求してゐる、宗教と云へば正しき佛教即ち日蓮主義より他に價値ある宗教があるか、此の時此の際日蓮主義は時代の指導者を以て任んじたる宗祖日蓮の一代の血涙史に感憤興起し、時代の血となり肉となる大傳道を開始しなくてはならぬではないか、我が妙滿寺に於ては其の第一線戰場として妙滿寺境内大天幕中に於て七月二十五日より毎夜五日間連續大講演會を開催した。街頭布教、或は野外天幕講演、之れ時代適應の生きたる布教方法ならん、有緣無緣の人自ら集ひ五日間當に聽衆二百餘、妙滿寺境内實に一偉觀を呈せり、其の講師講題を列記せん。

△七月二十五日

一夕は一日を讃美し死は一生を讃美す　　河合　陟明氏
一時禁匿敎の途奈何　　川崎本山部長

△七月二十六日

一病める社會と日蓮主義　　有田　宏道師
一宗教の綱格　　上田　智量師

△七月二十七日

一人生安住の道　　大塚　正芳師
一希望に輝く人生　　土持　良達師

一不滅の信仰　金光　孝碩師
△七月二十八日
一出ずるには唯一門あるのみ　藤山　本成師
一日蓮上人と現代　吉塚　通暎師
一佛教の綱格　上田　智量師
△七月二十九日
一正しき佛教と日本國　長谷川理學師
一時弊匡救の途奈何　川崎本山部長
（長谷川記）

## ◎京都健兒會

六月十五日　訓話　土持　良達師
勇氣に就て
同　廿二日　同　外　數名
信心の德（其一）
同　廿九日　同
同　（其二）　同
七月　六日　同　同
同　（其三）　同
同　十三日　同　同
日蓮大聖人の御高德
同　廿　日　同　同
結　巡
同　廿七日　同　同
日什大正師の御高德

同　同　はちす會員へ
知識修行鈔講義　同
納涼講演の時
七月廿五日　優しき心　古川　正藏
同　廿六日　蟹淵寺　山田　信三
同　瓜子姫　土持　良達
同　廿七日　尊き犧牲　吉田末次郎
同　金角大王　古川　正藏
同　廿八日　佛の子　古川　正藏
同　小僧の智慧　土持　良達
同　廿九日　見て御座る　吉岡末次郎

## 神戸法戰誌

七月六日　日曜會　午前九時より
讀經後　初心成佛鈔講義　講師　熊井　本光師
七月十二日　結人會例會　午後二時より
讀經後　法華經物語　講師　熊井　本光師
七月十三日　日曜會　午前九時より
讀經後　初心成佛鈔講義　講師　熊井　本光師
七月二十日　日曜會　午前九時より
讀經後　初心成佛鈔講義　講師　熊井　本光師
七月二十七日　日曜會　午前九時より
讀經後　初心成佛鈔講義　講師　熊井　本光師
七月二十七日　例會　午後七時半より
讀經後　說教　講師　熊井　本光師
多數來會
八月三日　日曜會　午前九時より
讀經後　初心成佛鈔講義　講師　熊井　本光師
盂蘭盆修行の爲と経用の爲め第二日曜より第五日曜まで休會、九月七日より日曜會を始める。
八月三日　神戸統一團の事業の一部として街頭教化運動を午後七時より行ふ。
日暮光道師引卒のもとに數十名行列「我れ日本の柱とならん」と書いた旗其他數流の會旗を押立、知法思國の歌を合唱しながら所定の場所まで行進。
第一會場に於て、境谷光信君先づ精神文化の必要を解く、次に安本氏、人心教化の大本と力說、林氏、横越氏、倉藤氏の三氏は自己體驗より得た宗教の信仰と題し、他經よりも法華經の卓越せる要點に付き順々熱辯を振ふ。聽衆二百數十名。

第二會場　林氏先づ開會を宣し、安本氏前同樣熱辯を振ふ。次に井上猛氏法華經より見たる人生觀に付き大約一時間熱辯を振ふ。
最後に日暮光道師「我れ日本の柱とならん我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」の御遺文を引用して、日蓮上人の國體觀に付き、熱辯を振ふ。聽衆次第に其の數を增す、此の日、統一團の宣言、知法思國會の歌を、パンフレットにして配布す。

## 金澤教報

家庭講演　七月二日芳斎町若杉宅にて
受難は創造なり　能仁　一十師
工場講話　七月三日錦華紡績にて
嚴肅なる摂理　能仁　一十師
鐵道講話　七月六日午前九時金澤驛にて
皇國の基礎を固めよ　能仁　一十師
明淨女子青年會七月六日午後一時
女性觀の妙旨　能仁　一十師
家庭講話　七月六日夜三間道彌勒宅にて
皇國魂に歸れ　能仁　一十師
精神講話　七月十七日金澤貯金局にて
事務遂行の一考察　能仁　一十師
天晴會　七月二十五日本長寺にて
皇國精神に歸れ　能仁　一十師
生ける信仰　富元　會榮師
家庭講話　七月二十九日河合氏宅にて
信仰的鍛夏　能仁　一十師

## 中國教戰史

六月一日　同信會　中山　賢勇師
遺文に漲る大生命
同　九日　加美村青訓記念講演會於同地小學校　澤　理學士
青年待望の時　中山　賢勇師
純我に徹するの力
同　十五日　結人會
不遇の窮者　中　山　氏
同　十八日　村聯合青年團一夜講習會後
尊容を墓うの心　中　山　氏
同　廿五日　高陽村敬老會並青年團總會　高陽小學校長
開會の辭　中山　賢勇師
社會生活の一考察
同　廿六日　久米郡櫛原鶴山主催講演久木小學校講堂　安藤　理學士
開會の辭
大乘的生活の妙用　中山　賢勇師
七月一日　同信會
餘命に咲く華（開題を偲ぶ心）　中　山　氏
同　七日　川崎本山部長を迎へて赤磐郡佐伯村稻荷、高田、區合同主催講演會
開會の辭　中山　賢勇師
時弊匡救の道如何（其一）　川崎本山部長
同　夜　於久成寺公開講演
開會の辭　中山　賢勇師
時弊匡救の道如何（其二）　川崎本山部長
同　十四日　久米郡櫛原鶴山主催大講演會於久木小學校　熊谷福太郎氏
開會の辭　學理士
青訓に對する注意　工學士　濱口課長
社會生活の一考察　中山　賢勇師
時局對應の精神　能仁權大僧正祝下
同　十五日　結人會
一率の妙趣　中　山　氏
同　七日　赤磐郡仁堀村結人會主催講演
潛在意識に信念を加へよ　中山　賢勇師
廿日より廿五日迄郡明德會囑托各地講演
墨本。新治。佐伯、周匝、各村小學校並公會堂
講　題

時代推理と宗教の使命　中山賢勇師
光明世界に結達して　天臺宗　桑本光照師
（已下省略）

# 彙報

## ○保田喜助氏の特志

神奈川縣鎌倉飯田三上義徹師の信徒にして「統一誌」の愛讀者である保田喜助氏は今回統一團報初號（明治三十年一月一日發行）から三百七十七號まで取揃へて統一團へ御寄贈下さつた、有るべくして無かつた本誌は今後は必ず、本團の名と共に後世へ傳へればならぬ大事な活動記錄誌である。中にチョイ〳〵缺本になつて居るが後日心掛けて置いて補全したい又其後の分も取纏めたいもので大方の御賛助を望む。玆に一言誌上より保田喜助氏に甚深の謝意を表します。（統一團內梶木顯正拜）。

## ○宮岡中將の御長逝

故海軍中將宮岡直記閣下はふさ子夫人と共に熱心な日蓮主義者で同時に又最も古い吾が統一團の擁護者であつた。昨年暮れあたりから健康勝れざられず療養に心を盡されて居られたが遂に先月十四日、七十四歲を以て赤阪仲の町の自邸で御逝去になりました。

故閣下は夫人ふさ子刀自と共に崇高な人格者であられた。身は軍人として國家に捧げ至誠奉公、定年に達した後は更に、國民思想の善導に餘生を捨り自ら「皇民會」を興し會長と成つて東奔西走、自宅の一部を皇民會に寄附し、且つ藏書の全部を寄贈して皇民會圖書部を設置し眞內青少年の讀育に盡瘁された知き、實に身命財を國家の爲に捧げて居られた。

我が統一團に對しては岩野少將、矢野閣下等と共に顧問として又擁護者として夫人ふさ子刀自と共に廿有餘年間御援助下さつた恩人である。今日閣下の知き人格者を失つた事は國家としても吾が統一團としても誠に痛嘆の至りとする處、吾等は故閣下の御遺志を繼紹すると共に謹で感謝を表する次第である。

去る十六日午後二時本多大僧正現下導師のもとに青山齊場に於て本葬を執行された。戒名は

「正行院殿國本日慶大居士」

玆に誌友諸賢と共に閣下の御冥福を祈りつゝ慶而弔意を表します。

## ○ホノルル妙鏡法尼のお便り

拜啓御一統樣御健勝社會敎化の爲御奮闘深謝申上候扨本法華の信者光永初代殿故郷訪問の彌り永く東京滯在ゆは皆々樣何から何まで親身も及ばざる御厚情に預り逆も筆紙に盡し難き程感銘致し居り申候　又光永夫人の話に依れば當地組本敎會館設立の事に就ては當長現下、本多現下、統一團、地明會、某德尊人會等の方々が熱心御後援下さる由、さすれば當布哇唯一の顯本法華會館設立も必ず近き將來の內に實現する事と期待唯今は其計畫中に御座候　御有志御後援のもとに當地相當の會館設立致し度何分宗門の爲社會の爲御盡力被下度候先は光永初代夫人に代り厚く御禮申述御一統御健勝法國の爲祈上候

南無妙法蓮華經

布哇ホノルル

日比野妙鏡合掌

## ○國民敎養講座

去七月廿七日本多現下の「佛敎の本質と其價値」と題する御講義は暑中の爲め休講の處、來る九月廿一日第三日曜日午後一時半より開催の豫定に付御誘ひ合せて必ず御來聽を切望致します。



## ◎京都新報

△千載一遇の宗祖大聖人六百五十遠忌來年修行に就ては本年六月より部長山內近末寺院一同全く獻身的に働いてゐる、面白い話がある六月北陸方面へ浮財勸募に巡行して大成績を得たる川崎部長は續いて七月和氣津山方面へ勸募に出張した。打電にて迎へに出れば部長疲れて持參せし蝙蝠傘帽子共に無く代表的に疲げたる頭をどか〳〵しつゝ少しく疲勞なおびた笑顏にて下車、某君傘は帽子はと呼べば忘れた〳〵と、炎の暑さに永い旅では忘れ病も發する譯けですな。

△寂光寺の上田師晉山以來數十日だが度び〳〵混雜殿に見舞はれてゐる、外觀が立派なので混雜殿がんちがいをしてゐると見へる、

△寂光寺の上田師、成就院の有田師、今度顯本青年聯盟より上田師は新地開拓の功有田師は本山常侍の功に依り表賞され香盒一箱を贈くられた、御祝として一同招待されて御馳走になつた。どん〳〵表賞されてほしいですな。

△大慈院の主持師昨年新築が完成して內容まではは權限外だが外觀は實に立派で正にブルヂョア階級だね、頭は光輝燦然としてゐるが子供會の主任にて子供の先生と稱せられてゐる。さすがは子供の事に付ては熱心にて子供の事に關する催しがあると遠近を問はず出かけて行つて新智識を得て來る樣だ。

以上

## 誌料領收

自七月二十一日
至八月二十日

一金九圓也　神戸　熊井本光殿
一金貳拾八錢也　盛岡　木下圓英殿
一金六圓也　札幌　本澤隆正殿
一金貳圓貳拾錢也　明石　龍川福太郎殿
一金壹圓也　長野縣　浅海鈴吉殿
二金四圓四拾錢也　東京府　岩本芳雄殿
一金六拾錢也　松江　米田　稔殿
一金拾壹圓拾錢也　廣島縣　村上信夫殿
一金貳圓貳拾錢也　東京府　佐藤安子殿
一金貳圓貳拾錢也　臺南州　鈴木國之助殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　竹內太八郎殿
一金貳圓貳拾錢也　川崎　毛見春吉殿
一金五圓也　東京府　內倉治吉殿
一金壹圓貳拾錢也　橫濱　長谷川鶴太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　松江　米田　稔殿
一金六拾錢也　川崎　廣瀨　讀殿
一金參圓五拾錢也　四日市　田久保本　誓殿
一金六圓七拾錢也　神戸　熊井本光殿
一金八圓也　大阪　田端道子殿
一金貳圓也　東京府　山路俊三殿
一金貳圓貳拾錢也　岡山縣　橙原荒治殿
一金貳圓四拾錢也　津山　林鶴太郎殿
一金貳拾七圓也　小田原　中村銀蔵殿
一金貳圓貳拾錢也

右難有入帳仕候也

「統一」會計

## 本多猊下著書（在庫品）

○法華經講義　上下二巻（賣切）
定價金參圓　送料拾四錢

○法華經要義
定價金貳圓五拾錢　送料拾一錢

○日蓮主義の本領
定價金壹圓八拾錢　送料拾錢

○日蓮主義の心髓
定價金參圓五拾錢　送料拾六錢

○日蓮主義の精要
定價金貳圓　送料六錢

○聖語錄
一冊八錢　送料三厘宛

以上「教」發行所へ御申込に限り定價の一割引、外に要送料

施本用小冊子

○本感應妙を信じて
同　前

○法國冥合
東京市外南品川町妙國寺内
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番



統一

| 定價 | | | |
|---|---|---|---|
| 一ヶ年 | 半ヶ年 | 一冊 | |
| 金貳圓貳拾錢 | 金壹圓貳拾錢 | 金貳拾錢 | 送料五厘 |
| 送料共 | 送料共 | 前金之事 | |

廣告料

| | | |
|---|---|---|
| 四分一頁 | 半頁 | 一頁 |
| 金五圓 | 金九圓 | 金貳拾圓 |

統一表紙一頁金貳拾圓前金之事

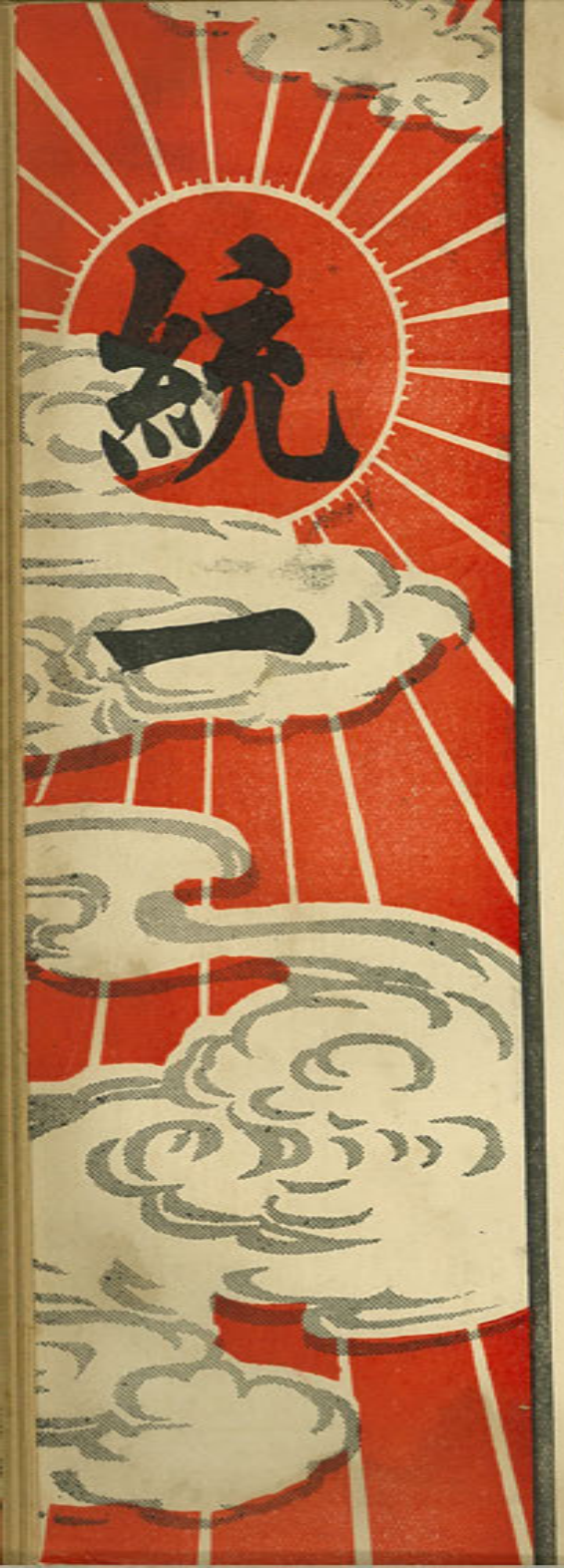
昭和五年八月廿四日印刷納本
昭和五年九月一日發行（第四百二十六號）

神奈川縣横濱市櫻子町廣地一四八
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百六十一番地
印刷所　郁印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ


## 目次


道德の批判より見たる佛教……本多日生
天風三萬里紀行（其十三）……小林日種
記事
○野口上人の來信
○各地教報
○誌料領收
○編輯室より


第三十五年十月號